

[翻訳]

ローマ帝政時代の帝国思想

—1942年4月18日、フライブルク大学ナチス大学教員同盟研究集会の際になされた講演—

ヨーゼフ フォークト 著

酒枝 故意 訳*

今日、帝国思想がその力とその雄大さを再び獲得しているが故に、こうした概念を遠い過去とか、外国の歴史に適用するのは、何より問題であるように思えるかもしれない。しかし、我われの帝国思想は、何よりもドイツ第一帝国に拠っているのであるが、その帝国は、Imperium Romanumと関係があり、それに因んで自らをそう呼んだのである。それは、ローマ帝国と、単なる時間的な継続というだけでなく、また内的に結ばれていた。即ち、精神的世界としては、第一帝国は、遡れば古代に近く、同時に、他方で後続の新しい時代のヨーロッパとも近い。最近ではギリシアのポリス世界とローマの大帝国が特有の連続をするギリシア＝ローマ古代世界を、最初のヨーロッパとして適切にも見なすが、また、それを以って現代にまで生きて働く人間の一政治的基本秩序と認めている。固有の政治的構造の諸々の相違にもかかわらず、また同時に帝国概念の相違にもかかわらず、厳密に言えば、我われにもまた妥当するその評価において、それは、古代とヨーロッパの共通財産の一部なのである。広大な領域に住む多くの諸国民に対し、権力とその職責の問題を絶えず統制し、広範囲な影響力を振るった政治権力の存在を、帝国にとって本質的なものと、我われは考えている。この体制の構造には、精神的な絆が働いていなければならないし、一つの目標が明確にならなければならぬ。物質的な構造の仕組み以上に、部分は、全体からその生の安寧を獲得するに違ひなく、かつ部分は犠牲を払うことの意味を受容するに違ひない。このよう帝国は、その広大な領域の力と精神の統一したものであることが明らかになつ

* Tetsui SAKAEDA 本学名誉教授

ている。

さて、Imperium Romanumに、いつの時代も人々が感嘆し、また技術化時代の者たちにとっても、印象深いことは、この帝国では、一つの単独の国家によって、とてつもなく強力に、確固とした権力機構が生み出されたという事実である。ヨーロッパの地においては、この様に包括的で、密度の濃い組織は、二度とその後達成されていない。我わがが、ヨーロッパの地について論ずる際に、この帝国の全体をかつて含めたことはない。ローマ帝国の領域は、むしろ地中海世界であり、それは大きな内海の周囲に横たわっているヨーロッパ、北アフリカ、西南アジアの諸地域である。この海の中心に位置することによって援けられ、ローマのイタリアが、数百年間に亘りこの地を獲得してきた。ローマ拡大の始まりには、人口の多い農民たちのために土地を生み出すことが重要であった。その後、ローマにより秩序化されたイタリアを安全に守ることが、とりわけカルタゴ商業帝国やヘレニズム世界の強大な諸国家との戦いにおいては、政治の決定的ファクターであった。しかし、ローマは、この複雑な土地から多くのものを全く望まなかつたし、それどころか、ローマが力と秩序に満ち、さらに生き生きした魅力を発揮したとき、イタリアは、自ずから手に入り、苦闘することもなかった。しかし結局、あらゆる方向に伸び行くこの政治的構成体は、防衛可能な国境を確保するという最も困難な課題を抱え、新たな領域では、多くの戦い、多くの攻撃は避けられなかつた。こうした土地の開発や安全確保の計画的処置は、早い時期に起こっていた。包括的な指揮権を備えた最高指揮官が、実際の国家建設者になった共和制後期に、このことは、全く明らかになっていた。その当時、ポンペイウスが、近東を治め、カエサルが、ガリヤ地方を征服して、ヨーロッパ北部への出入り口を開き、そしてアウグストゥスが、ドナウの境界に達した。カエサルが、なお人の住める土地の果てにまで達しようとした一方で、ローマの大衆に人気のあったアウグストゥスは、今や確保された国境内の国家を確固として保持することに全力を集中した。それ以来、征服という考えは、確かに忘却されることも、或いは放擲されることもなかつたが、自然的、かつ人為的に生まれた国境の安全確保ということが、政治の前面に今や立ち現われた。これら国境の前面には、クリエンテーラ諸国家により守られた領域が横たわり、従属せる諸王国や部族たちの支援を受け、遠方の国境外の世界に、必要ならばまた迫ることも可能であった。これ

らの国境によって取り囲まれた諸々の土地は、広大な領域的統一体に組織され、確固として結び付けられるに至った。ローマ人の見方によれば、帝国は、地上世界（orbis terrarum）の統一を表していた。ゲルマン人の世界とかパルティア人の東方国家のような既知の部分的地域が、例え含まれていないにせよ、重要なところ、価値十分なところは、けれども占有していると信じられていた。

これらの広大な領域に、ローマ人は何世紀もかけて政治的秩序を打ち立てた。ただ榨取するために土地を占有したり、支配のための支配を、ローマ人が密かに心中欲する時代が、確かにローマの歴史にはあった。だがそうした流血の侵略の時代は過ぎ去り、その支配本能が、ローマ的なるもの（Romertum）の政治技術を高めるのに寄与したことは明らかである。全体的に見れば、ローマの戦争指揮は、自らの財産を守り、また外国の不法からの防御として、ローマの実力行使は秩序を目的とした職務として見なされていたのであり、それは、責任感に満ちた指導の結果から現れたものであった。また指導者自らが責任を負うより高い目標、とりわけイタリアにローマの権力を打ち立てるという目標の進展は明白である。他の国々と多くの同盟の締結や、多くの都市をローマの都市同盟に受け入れることにより、その領土の組織的拡大を推し進めることを、ローマは理解し、同時に、自らの権力を高めることは、非常に多様な政治形態を許容する一方で、しかしまた統一意識も生み出したのだ。ここでもまた厳しい戦が戦われ、占領の厳しい法が、突きつけられはしたが、何処であれ、征服、隸属化の状態に永久に留め置かれることはなかった。それどころか、その方向は、包括的な同盟組織や統一的都市同盟組織にまとめられて、ローマ市民法の中に統一されたイタリアになった。このような統一イタリアの誕生は、自立的小国家を規準として知る古代政治の範囲においてまさに、ローマ人の政治的天賦の才能（genius）の傑出した仕事であることが明白であった。

ローマの政治の動きは、だがカルタゴとの鬭いの場に先ず踏み込むであろう海の彼方の様ざまの土地で危険に晒された。イタリアで取られた遣り方が、ここでは単純には転用され得なかった。その理由は、これらの土地は、ローマから遙か遠く離れ、民族性や文化的に異質であったからである。また他方、ローマの権力の安全のためには、ローマの従属下に置くことが求められた。この領域は、服属的地域となり、属州にされた。即ち、その住民たちは、国家とは無縁なものに留

まり、彼らは、毎年の貢租を義務づけられ、ローマの総督によって統治された。この地では、専らローマは支配、服属者は労働に関わった。ローマの機能は、本質的に権力を執行すること、命令を与えること、ローマ的に表現すれば、imperiumに存した。その始まりは、ローマの長官の命令権を意味していたこの言葉が、それ以降はローマの権力的地位の表現になり、終には支配領域自体を示すものになった。ローマは、その属州制度に、ローマに先行するカルタゴの勢力とかヘレニズム諸国家の制度を継承していたのは、全く疑いない。この上述の、それ自身古代オリエントに遡れる土地制度に由来する様ざまな誘惑に、ローマ、殊に共和制の危機の際のローマの貴族は唆された。諸々の属州は、ただローマの為だけに存在しているという事実は、当事者たちには非常に厳しいものであった。即ち、もしもローマの総督とか国有地賃借人たちが、なお、加えて彼らの私的な商いをした場合、それは言語道断なものに違ひなかった。共和制末期頃に初めて或る変革がなされ、腐敗した支配層は、失脚せねばならず、都市国家ローマは、帝国的統治を持ち出さねばならなくなり、ただそのようにすることで、支配に際しての責任という観念が、再び広範な評価を受けることが可能になり、さらに現実的な政治的行為に対しては、帝国の指導というより高き目標が、決定的になり得たのである。

一人支配をめぐるその戦いの最中に、ユリウス カエサルは、その綱領を宣言したのである、<イタリアに静穏、属州に平和、国家に安寧> (bell.civ.3,57,4) と。これは、真に王者に相応しい人物の大いなる理想であった。独裁は頓挫するに違いないという自覚とローマ的なるものの伝統に逆らって、絶対的な専制、無制約的世界支配、それにイタリアと属州の間の均等を狙った彼のプランには、確かに普遍主義が流れていた。しかしながら、彼の後にアウグストゥスが実現し得た帝国秩序は、将来に亘る支配権力の義務意識を回復した。必要不可欠になった個人的国家指導は、元首の内にローマの特質を保っていた。帝国の構造にも、またはっきりとローマが存していた、と言うのは、ローマ市民が、明白に支配的地位を占め、そしてイタリアが、中核的領域を構成し、そこから世界は導かれねばならなかつたからである。アウグストゥス時代の世界支配は、諸々の土地を守り、管理し、かつ維持するという正当な行為であるべき故、長期に亘る内乱による荒廃の後、これらより高き使命のためには、元首は、ローマ国民を、先ず改めて

鍛えなければならなかった。活力を強め、支配者に相応しい高潔さを再生することが重要であった。今こそ、ローマは、諸国民の支配という神により与えられた使命の求めに応じることが可能になった。属州の服属民たちは、この帝国秩序の中で、明らかに、総じて平等な権利者たちではなかつたが、しかし彼らもまた、ローマ市から派遣されてきた者たちにとって搾取対象物では最早なく、誠実に保護されなければならない被護民であった。彼らが払わねばならなかつた様ざまの犠牲行為に対しては、帝国が、自らなす彼らに対するその給付は適切であらねばならなかつた。その場合、属州は、主権を放棄し、その従属性に応じて、皇帝に貢租を支払うということであった。また、新たにそこに加えられたのが、属州民は、帝国初年兵の補助軍に用いられる、ということであった。これらの重い負担に対する埋め合わせとして、属州民たちは、法的な市民身分に至る権利を一定の前提の下で獲得し、土地を見つけてローマ経済体の中で彼らが開発したり、帝国が保証する平和の配当を得た。それ故ローマと服属民との関係における成果と報酬は、何か市民と外国人のそれのように見えるのである。

ついでに言えば、この属州制度は、画一的では全くなかった。出来る限り僅かしか自らの労働力を使わないことが、全時代を通じて、ローマの基本であった。属州総督は、僅かな副官しか置かず、少数の召集兵たちで広大な管区を守るということが、ローマの支配制度における通常の方法である。この方法は、その州の支配層を動員することと、その土地の諸々の慣行を黙認することをはじめから前提としていた。文化的面では、ローマは、他の国々の世界観を寛容に認め、属州民の信仰觀やら崇拜には関与せず、人々の言語も放任されていた。それで帝国の中に、多種多様な社会的境遇とか宗教的関心が見出されるのである。そこには、非常に旧い都市文化の遺産を守り、かつヘレニズム的な特性で互いに同化されてきた東方の地域が存在し、また激しく自らの自由のために戦った西方とか北方の若々しい民族は、一終に征服されたがー、ローマの指導に敏感であった。そしてこれらのグループには、一方全く異なった民族も存在した、即ちフランスの地のケルト人たちは、部族定住地制度や彼らの有力者組織を持ち続け、次いでこれらをローマの秩序の中で成立せしめた。また、東部アルプスとバルカン地域のイリュリア人たちは、部族連合とより確固とした後ろ盾としてその地域文化を手にしていた。

多様な姿をしたこれらの諸民族の世界が、ローマによる支配の過程で統合されていった。だからと言って、ローマの政治がこの方向に公的な強制をしたという訳ではなかった。むしろ、ローマ的な生活形態の魅力こそが、決定的であった。その地域の一体化は、ローマ人と同じ程度に服属民たちの為したことであった。確かに国家の存在が、諸々の地域に広範囲に共同体を形成する力を振るったimp eriumの領域内では、多くの諸民族が同一の運命を、様々な文化が同一の生存条件を持った。だが、この広大な領域におけるローマの秩序の基礎は、平和を維持することであった。これは、国内の反目と多くの地域、しかし、大方はギリシアとイタリアの地を荒廃させた流血の内乱の終結を意味した。なおローマの平和とは、軍團を投入し、さらに広き大河と共に強力な国家の境界を作っていた防壁を築き、外国の襲撃から国家を守ることを意味していた。帝国の防衛には、市民も属州民も協力し合い、軍隊は、国家の骨組みの強力な鎌であり、軍の訓練所が、最も実り豊かに帝国意識を育てる場所であった。今や、こうした平和が広がっている領域では、人びとの活動は妨げられず、文化的生活がよく守られていた。こうした世紀の判断によれば、ローマの平和の範囲とは、良風美俗の範囲と同等であった。その外側に存在する全てのものは、蛮族と呼ばれた。即ち、その活力と高潔さ故に、模範的とされている例えばゲルマン人のように、彼らは戦では勇敢であり、その部族生活においては健全であったようだ。だが彼らは、また野生的であった。この平和で文化的国家においてのみ、安息と安心、幸福と無事が期待され、常にローマ支配への賞賛が語られていたようだ。こうした文化的世界のあらゆるところが、往来手段の発展と安全故に相互に緊密に結ばれた。というのは、ローマの支配が、道路や橋、運河を生み、ローマの管理人や大工の棟梁たちは、その土地の自然の広さを見抜き、形にしていた。しかし、國家の組織を最も迅速に動かすことを可能とした帝立郵便制度の誕生とか、さらにライン川下流域から、小アジアの道路網がそこから始まるボスporラス海峡にまで及んでいる属州道路体系の統合によって、帝国全土で、包括的な交流の一体性が可能となったのである。人とものが、古代世界の陸と海を通って、以前には決してなかつたが、全く邪魔されずに行き来し、そして帝国の終末後には、人々は一千年もの間、ローマ人の交通網によって生きて行ったのだ。

下位の行政組織としての都市共同体と、諸々の属州における生活の一体感を関

係させるローマ的やり方が、諸々の地域を一体化するのに、平和や盛んな交流よりもなおいっそう深く働いたのである。古代世界全体を通じて、都市が政治生活の細胞でたとえあったにせよ、都市制度は、ローマによってまた西方や北方に齎されたのである。その周囲の世界に対しローマの植民都市が、典型的働きをなし、そこを属州の重要な地にした。帝政初期に、諸々の地域で感じ取られたローマイタリア的な構成要素の変化は、このような植民により結果的に生じたのであった。ネルヴァ帝およびトラヤヌス帝以来、しかしながらイタリアの地では、活力の衰退が差し迫っていることが認められ、人々はいっそう強く属州に引き寄せられて行つたに違ひなかった。今や以前よりも数多く、そうした諸々の地方都市の名士たちにローマ市民権が付与され、或いは新たに開拓された土地では、都市共同体そのものに、ローマの市民権 (civitas) の第一段階としてラテン市民権が付与された。それ故、ローマの支配の結果として、属州の都市化が、部族共同体や家族共同体、それにその村の種々の文化的なものを犠牲にして生じ、言葉の固有の意味で、市民化、言い換えれば、キーヴィタースの拡大化、都市的共同体秩序、ローマ市民権の拡大ということが生じたのであった。ラインランドであれ、或いは北アフリカであれ保存してきたローマ諸都市の廃墟から、人々は市民的生活がどのように一様に形作られていたのか理解するのである。要するに、同様の市場、同様の体育館、同様の競技場、同様の社寺と神々。こうした数世紀來働いてきた傾向を受けて、カラカラ帝の総括的規定が、少数集団から帝国の自由民に目を転じ、彼らをローマ市民に格上げし、そうして世界市民的な統一性を実現したことが、かなり明らかになっている。しかし、今日でも、最近の研究が明らかにしているように、民族の法は、なお継続し、民族の言語は引き続き使用されていて、属州の強引なローマ的形態への同化を認めないものたちも存する。諸々の地域の全般的一体化と西方の民族の広範なローマ化というものは、属州民のローマの様ざまの課題に対する自発的な協力と、またキーヴィタースという囁きされた地位へその土地の指導層たちを恒久的に高めることによって、まさに根本的に成し遂げられたのである、ということがそこに存している。

ローマの国家構造のこの特質は、ローマ世界の半ば官製の世論により、しばしば賞賛されており、又そのことは、死後のために記されたものではなく、実際的目的のために書かれた碑文とかパピルスによる多くの日常生活の証拠によっても

確証される。タキトゥスのようなローマの政治を批判的に評価している者自身さえ、市民と属州民のこの協同と永続的な制度の創造に、帝権の偉大な歴史的能力を見ている。バタヴィ族の蜂起の説明の中で、タキトゥスは、ガリアにおける最後の蜂起部族の鎮圧の際、ローマの軍指揮官ケリアーリスに演説をさせ、そこでローマの立場を印象的に展開させている (hist.4,73f.)。多くの彼以前のローマの軍指揮官や征服者たちのごとく、ローマ人は、ガリア人の招きでその地にやって来たのであり、ローマ人は、ゲルマン人からガリア人を保護することを始めから負って来たことを、ケリアーレスは強調する。更に、彼は、続ける、<君たちがローマの法秩序を受け入れるまでは、ガリアの地では常に圧政と戦争の苦難が存在していた。我われは、たびたび挑戦されたが、我われは勝者の権利として、君たちに平和を守るに必要なものを課していただけである。実際、民族の安寧は武力なしに保てない。武力は、兵士の給料なしに、給料は貢租なしに維持できない。それ以外の全てのものは、服従者と支配者は共有している>。彼は、次に、属州で到達可能な軍や行政組織における長とか皇帝に対する属州の良き関係にも言及する。彼は帝国の政策の欠陥や過ちから眼を背けたがっているのではなく、その反対に、彼は全く幻想を抱かず、自然の災害のごとく支配せる者の悪徳も受け入れねばならないと率直に言う。<ローマの支配が廃された後には、一そのようなことが絶対に起こりませんようにー全ての部族が戦う以外に、何がこの地に残り得るだろうか。この国民は、800年の幸運と規律正しい働きによって合体されている。これを搖るがす者は、自らの破滅を見なければならない。>それから、演説者は、頑固に意地を張って破滅の一途を辿るか、或いは素直になって安全に生活するか、その選択が部族民たちには残されているに過ぎない・・・と結論する。ここには、率直に、冷静な言葉で帝国の損得、服属民の犠牲と利益が明確に述べられている。ここに記されている描写は、現実の世界に近かったものであろう、いずれにせよ、それは実際に生活している人々の帝国思想を表している。つまり、こうした帝国思想の特質を我われの歴史的世界によって検証する機会を捉えたのである。

勝者の法は、国家構成にとって基本的なものであり、常に支配者と服属者が存しているということが、ここで意外にもはっきりと言われている。この絶えず存在する緊張の中でも、しかしまだ、両者の協同が求められ、それが達成されてい

る。属州民の協働が、既に必要不可欠になっていた。というのは、ローマ人は避けられないものとしてかなり多くのことを通常自ら遂行し、それ故ローマの国家行政の役人集団が、徐々にだが拡大していたからである。この属州が参画する最も重要な制度は、都市の行政機関であった。同時に広大な各属州には、定期的に召集される都市とか部族の実力者たちの会合が存在した。属州集会よりも名士会と呼ばれていたこの会合は、ローマ的事物に対する厳かな信仰告白として皇帝礼拝を執り行なったが、しかしながらこの会合は、明確なその機能の前提の下で、総督に対して執るべき態度とか、さらにローマの中央機関と連絡を取って進む可能性と権利を所持していた。これら全てのことは、協働が余りにも少ないと、自治行政に対する極端に控えめな評価のように、我われには見えるかもしれない。こうした批判をする際には、以下の点を当然考慮する必要がある、即ち、古代では、一般的に民族国家を、熱狂的かつ民族的一体性の規準であるとか、帝国創設の建設的活力であるとか見なすことはなかったのである。つまり、我われは、民族気質を政治的に形成する傾向などをこの国家に全く期待してはならないのである。だから、もし我わが、この点を考慮すれば、ローマ帝国は、国家の夫々の自立的部分を統合することにおいて機能しなかったように見える。キーヴィータスとか集会 (concilia) に現れるあの市民階級のエリートたちは、確かにその前段階を示していた。彼らを、自治には全く不向きであったと殆ど言うことは出来ない。だが、しかし、又ローマとしては、たとえ不法だとしても、自立する機の熟している彼らを服属者の状態に留めるべきであった。(Cic.rep.3.37)。しかし、こうした我われの異論に対し、属州の上昇した市民階級は、彼らのその地位に満足していたであろうとか、ローマの支配権からの解放の要求などを出したりしなかったと、ローマ人は恐らく答えたであろう。そして實際これは正しかった。ペルガモン、コルドバそれにルグドゥヌムの町の名士たちの野心は、ローマの市民権者への昇進、更には帝国の元老院階級或いは騎士階級への到達の道を求めていた。彼らの祖国の主権に関しては、最早何も考えていなかった。即ち、彼らの考えでは、唯一の国家組織があり得るのであり、それはローマであった。だから、ギリシア人のアエリウス・アリストイデスが彼のローマについての演説の中で断言していたように、ローマが、今や、全世界を单一のポリスになしたのであった。言い換えれば、この世界都市では、あらゆる地域から齎される最善の構成要員た

ちが、ローマ市民として支配的地位を形成し、一方、指導を必要とするその他多数は、従順に義務を負った臣従者を表していた。

他の多くの者たちに対して語っているのであろうこの声は、国家における一体性の精神的絆を明らかに表している。それは、ストア哲学の人間観である。我われは、そこにローマ帝国に対するヘレニズムの意義深い影響、謂わばアレクサンドロス大王の世界帝国並びに彼の後継者たちの諸国家とローマ帝国の精神的関係を識るのである。スキピオ・アエミリアーヌスのサークルにおけるギリシア思想家たちとローマの政治家たちの最初の接触以来、人間は例外なく理性的な存在として、個別的国家を超えた大きな共同体に属し、そしてこの理念的世界国家では、最良の人間が治めるために招かれ、彼は全てに正義を実現し、そして世界を申し分ないものにするであろうという教説が、ローマでは広がっていた。キケローが示しているように、ローマ帝国の具体的な事柄にこのストア的理念が現されているを見るために、ギリシアとローマの思想家たちが協力していた。この観念が、今や、完全に人々を虜にしていた。即ち、ローマ帝国は、彼らには、世界都市として、謂わば都市 (urbus) と世界 (orbis) が一体に溶かし合わされたものに見え、元首は、その王国に哲人が任命されたかのようであり、権力と精神を併せ持つもののように振る舞つたのであり、これが、マルクス帝に至るまでの二世紀の偉大な君主によって、繰り返し正当化されてきた解釈であった。ローマ市民である国民は、世界中から選ばれた才能ある選良として褒めそやされ、世界帝国の文化は、人間に相応しい文化と一般に見なされた。こうした哲学的普遍主義が、ローマの帝国思想に驚異的な精神的拡がりを与えていたのであり、ローマ支配が、統一への活動を強めれば強めるほど、この普遍主義は、益々深く影響力を増大したのである。

こうした哲学的根拠づけから、むろん又帝国思想の色々な弱点、その主義の明白な空理空論的傾向が公然となっている。人が生れる都市とローマ人が人類に対し現実化した世界都市との間には、何一つ自然的な結びつきも、血縁関係も、国民もそれ以上は明らかでなかった。ローマ的であることの証明としてトーガを身につけるということで、ローマ帝国の政治の形式主義が、哲学的に確認されるように見えた。この時代の政治思想が、現実世界から排除しなければならなかつたといつそう広範囲な特徴が、それと結びついていた。ストア哲学によれば、人類

の一体性は、自然によって与えられているものに基づいているのであり、それは、まったく特別の歴史的な行為を前提としていなかった。ローマ帝国は、それ故世界の自然な推移の結果として、謂わば自然の秩序そのものの表現として見られていた。それ故、帝国思想には、非歴史的因素が入り込んでしまった。この思想は、現代の歴史的思考が持っているような緊張を知らない。即ち、この帝国思想は、創造的人間の固有の使命をまさに信じ、偉大な行為の画期的な意義に関して知り、大胆極まる行為の計り知れない影響範囲を予想する、これらをなし得る能力を欠いていた。

実際、帝国の人間、とりわけ国家の代表者の歴史意識が、我われを非歴史的な気分にする様ざまの傾向を示している。帝国は、最終的なるものと一般に認められ、支配者とその服従者たちによって絶えず告知されていた特別な徵として、永遠性を得ていた。帝国のこの無限性に対して、歴史的な様ざまの出来事は、当然低く評価されることになったに違いない。何故ならば、こうした者たちの見方によれば、これらのこととは、永遠的な動きの中で起ることであり、サエクラ(saecula) という人生の大いなる諸時期で、或いは大きな循環の中で繰り返されていることなのである。何れにせよ、歴史の進行は、世界の自然的な循環の中に含まれることであり、その点につきストア派の者は、次のように語っている、即ち、<それは、永劫から永劫に上ったり、下りたりすることなのである>と。後の世紀にいっそう流布した世界の没落という観念自体は、この循環思考を突き破ることは出来なかつた。何故ならば、－この没落観の諸々の齎す結果を免れ－没落は、ローマの再生により、つまり新たな循環軌道の始まりによって、阻止されるからである。同様の歴史からの逃避が、オリエントに由来する四世界帝国の教説によってもなされた。ローマの信奉者たちにより、この教えが受け継がれた限りでは、アッシリヤ、メディア、ペルシア、それにマケドニアという先立つ権力国家の後の申し分ない順序として、ローマ帝国は一般的に解釈され、最終的なものの特質をこの帝国は備えていた。この教えは、ローマ帝国を貶めることにも、むろん度々使われたのであるが、その際には、この教えの代弁者たちは、それが、オリエントから期待した最終の帝国であれ、或いはキリスト教信仰による世界の評価であったにせよ、新たな、より良き帝国を期待していたのである。だが、この解釈は既に古代的な思考世界からは外れている。全般的に言えば、ロー

マ帝政期の歴史意識は、異教的な古代に固有なあの静止的なものに偏ったままだつた。この考え方は、人々に落ち着きとこころの強さという美德を植え付けたが、しかし、精神の冒険と同様に政治的行為における冒険をも困難にした。帝国は、満ち足りた世界の理想像に結局なってしまった。

こうした不十分さにもかかわらず、ローマの帝国思想は、様ざまの厳しい批判にも持ち堪えたのだった。その思想の最も安定した精神的支柱を、絶対的なるものとの宗教的な関係が確かに常に築いていたが、それは、神々の意思に基づき、勝利と力と国民の統治は、確実に神的起源を持ち、神の恩寵を十分に与えられたものであるというローマ人固有の考えに、支配を導き戻すものであった。ここでは、この広く広がった宗教的観念の基本線だけが、指摘され得る。特別に統治する使命を与えていているという信仰は、天から落とされたマルスの盾の中に、勝利と偉大さを担保するものを見ることを始めたラテン族の初期の時代に、既に生じていた。殊に、ローマ元老院の貴族階級は、共同体の決定と天上の諸々の神々の合図とを常に一致させる方向に導くために、神の意思を尋ね、そのことによつて、彼らは神的恩寵を担っているものと自身を考え、長期間、彼らだけがその資格があると見なしてきたのであった。ある場所に畏敬の念を払い、その場所の秘められた力に対し、ローマ人たちは、深い畏れを抱いていた。それで、帝国の成長が、そこから始まり、そこにあらゆる政治的存在が専ら現われた都市ローマは、彼らには、一個の偉大な聖なる場所になったのである。この都市ローマには、支配を担保する特別な初期時代に由来する古く尊いものが保持され、トロイア生まれの有望な守護神のごとく、エトルスキやギリシア人を継承する中で獲得された他のものも保持されていた。この都市には、神々の館として、神々の恵みとして、同時に重大な政治的決定をする場所として神殿が聳え立っていた。このように、ローマ人の使命信仰と彼らの帝国の永遠性は、この都市と、この永遠なる都市と結ばれていたのである。この使命信仰とローマとの結びつきは存続し続け、都市ローマが、帝国の中心であるだけではなく、皇帝の所在地であつてから、なおいつそう緊密であった。というのは、皇帝に、今やローマ権力の宗教的基盤が凝縮されており、皇帝権に、魔法のように煌く噴水の演奏のように、多くの諸国民の様々な思考が一つに統合されていた。ローマ人は、彼らの第一人者（princeps）を、特別な神聖さと力を保持する者として、取り分け、勝利の仲介者として崇拜

していた。ギリシア人は、理想的支配者に対する信仰、かつ共同体で創造的な活躍をする人間の神格化である皇帝崇拜に、贊助金を払った。また、皇帝は、このように神々に由来し、古代エジプトのファラオのように神王であり、その国家は、溢れる恵みと世界の平和を保証するであろうと云う見方が、オリエントから齎された。アジアにおけるアウグストゥスの支配は、善き知らせの始まりとして歓迎され、幸いを齎す神の子という観念が、ウェルギリウスにより西方に伝えられて以来、皇帝理念に神秘主義の傾向が入り込み、ローマが政治的に没落しても、この理念自体は、消滅すことなく長く存続した。アウグストゥスは、何よりも黄金時代の再来という信仰、また人類の究極的幸福という夢を身に帯びていた。

何処で、永久に、全ての諸国民は、祈るのか
一人の王、神、羊飼いに向かって、
預言者たちにより、彼の光り輝く綻が、語られた
あの日から。

(ゴットフリート ケラー)

カエサルやアウグストゥス、トラヤヌスやハドリアヌスのような皇帝たちの中の偉大な人物たちが、この信仰に、絶えず新たな養分を与えていた。けれども、三世紀の激しい動乱は、その同時代の人々には、神々の恵みの器のように思われた。確かに、彼らは、兵士たちによって上げられ、兵士たちによって打ち負かされ、次々に素早く使い捨てられたが、こうした皇帝なる人物たちが消耗される最中にも、皇帝権の尊厳性は、なお存していた。この好戦的な世界の何処かに、救いが、もし望まれ得るとすれば、他ならぬ昔の英雄のごとく、新たな先駆者自身であるこれらの君主に、彼らの兵士や農民の信頼出来るこの保護者に期待されたのであった。あらゆる不安と暴政にもかかわらず、又オリエンタルな専制主義の受け売りであるにもかかわらず、皇帝の日々は、なお克己であり、職務であった。もしも我われが、帝国文化の記念碑、或いは皇帝の布告の前書き、国家の貨幣表とか或いは専制君主の名前か権票を調べてみれば、至るところで、国民の信仰が生み出し、帝冠と緋色の外衣を身に着けた全ての権力者が受け継いできた皇帝理念の証拠に、我われは触れるのである。即ち、林立するシンボルと、神の恵みを

与えられた君主と彼の目出度き国民統治を告げ知らせている本当に長々とした懇願と約束の言葉に。

このように支持され、帝国思想は、長い間、ローマ帝国のぐらつきをなお力強く防いできたのである。しかし、マルクス皇帝以来、北部と東部国境では、ゲルマン人やイラン人に対し繰り返し、同時に戦わねばならなかつたのは明らかだつた。セプティミウス セヴェルス皇帝からは、帝国のあらゆる日々の構造は、戦争に合わせられ、イタリアとか元老院貴族の特権は消滅した。だがしかし、この破局的な三世紀においても、帝国思想は、一個の生き生きとした力であった。国境を侵していた諸々の異国の民自体は、この豊かで、文化的帝国の中に入る、というような高度の目標を何も知らなかつた。辺境の属州に現れた横奪帝たちは、初めて貨幣に *Renovatio Romanorum* (ローマの若返り) と告知させたブリタニアのカラウシウスのように、自らの地方的な政策をはぐらかし、それどころか、正統なる統治者以上に、普遍的思想と永遠のローマに全力を尽くすことを相応しいことと見なしていた。我われ、こうした戦いの経過から目を離さないでいる者は、後期古代の世界像と政治的現実の間に開いた深い裂け目に吃驚する。自由なゲルマン人たちが、侵入開始の主導権を握っていることを日々思い知らされる間にも、世界を包括する帝国について人は語っていたのだ。人類の黄金の時代が、夢見られ、そこでは、ローマの皇帝は、決して制圧されない東方の國の君主によって、敵対者として打ち負かされてしまう。ローマ人の美德が寿がれたが、ロムルスの子供たちは、今や世界の多くの血の流れの混じった混血たちであると無視され、畏敬の念を起こさせた名前は、今や唯の空虚な言葉の鞘に過ぎず、かつてあのように生命力に溢れたかんばせは、仮面のように硬直し、文化的活力の衰退を特徴的に示している幽霊のような傾向を、その生活が表していた。

むろん又、この時代自体は、帝国とその価値への真剣な異議の申し立てに事欠きはしない。我われは、ここで、自らの先祖伝來の生活秩序を守るために、潔く死を選ぶ自由を愛する多くの諸部族や国民の激しい動きに目を転じよう。ローマ国民の最良の者たち自身、何世代もの間、人間の道徳的行為に対し、特に上層の者たちのそうした行為を批判して來たことも、更に意味があろう。ギリシアの人たちは、教養的ルサンチマンから、強欲で、粗野な生き方をする者とローマ人を極め付けていた。ユダヤ人たちは、底知れぬ憎悪を抱いて、世界帝国の崩壊を

望み、日々<この高慢なる支配の根絶>を祈願していた。これらの異論、攻撃は、だが帝国思想を揺るがしはしなかった。世界史的な勝利を、ローマ帝国に対するキリスト教徒たちの抵抗だけが持ったのであったが、その勝利は、根本的で、非妥協的に貫徹され、生き生きした行動によって齎されたのであった。周知のごとく、初代キリスト教は、その指導者的人物たちにおいては、国家を拒まず、それまでのギリシア・ローマ世界が為してきたように、生の最も価値あるものと国家を一般的に見なしていることを示唆さえしていた。国家信仰は、ローマ帝国に必要なものであり、それは、本質的に多神論であり、皇帝宗教に基盤を置いていた。三世紀の全般的な生の脅威の中で、宗教の根源的基盤は、古代の人々の逃げ込む場所であることを明らかにしていた神々への信仰が、ローマの政治の支配的な動機に又なった。けれども、キリスト教徒たちは、皇帝像の前で犠牲を捧げることを拒否し、自らの確信のために死に向かった。この二つの信仰的立場の間には、和解は不可能のように思えた。しかし、今やキリスト教との対決の中で、正に帝国思想の内的な矛盾が見せつけられたが、それは、新しい宗教の歴史的力強さを現していた一つの出来事であった。異教国家は、その存在の戦いにおいてあらゆる神々に助けを求め、神々の多様性を、国民の多様性を理由にしていた。何故ならば、神々は、原像のようなものであり、それに従って、様ざまに異なる国民は、形成されたのであったからだ。このような政治神学を首尾一貫して貫徹した場合、その結果は、あらゆる諸国民は、その固有の性質と独自の国家性をそのままにしている、と云う結果を導くに違いない。しかしながら、このことは、これまでの骨組みの国家の終末を意味していた。それに対して、キリスト教は、一個の神と人間の観念を保持し、それは帝国には、全く別個の方法で相応しいものであった。キリスト教徒にとって、様ざまの人間の種族の一致は、一つの創造神と世界の唯一の救済の信仰から生じた。特別に召されたことを意識して、キリスト教徒は、自身を神の民と名づけ、それは世界人であった。教会の組織の中に、新たに立てられた、あらゆる国家を貫く一致が強力に示されていた。その戦いの時代、キリストの言葉に従うものたちは、新たな信仰の教育的能力、並びにキリスト教とローマ帝国の歴史的な並立関係を強調していた。それは、一つの歴史的に実りある見方であった。確かに、帝国は、オリエントの太陽神信仰に、精神的一致を求めるよとなお試みていた。しかし、あらゆるキリスト教を制圧するための試みが

失敗し、延いては、その当時の信仰に従い、古き神々が無力であることが明らかになった時、前代未聞のことが起きた。即ち、コンスタンティヌス皇帝が国家にキリスト教を採用したのだ。彼は、国家のためにそうしたのであった。何故ならば、その新しい神は、唯一神であり、皇帝や彼の軍にとって勝利の源として力を持っているように彼には見え、ストア的な人類理念の意味で、自然で、全般的に妥当する宗教と、彼はキリスト教を見做したのである。このローマ帝国をキリスト教と結びつけることは、同時代人たちには、予定調和のように見えた。だが、その関係は、束の間だけの調和であった。帝国思想は、キリスト教にとって固有のものである激しい緊張を、今や負わされることになった。キリスト教の教説の中に、今や統一の基盤が与えられたが、この教説は、自身においても独自であらなければならず、それ故、信仰的統一の確立と安定が政治課題になった。ここに、キリスト教と帝権の間の軋轢の可能性が存在した。そして更に、キリスト教が、帝国内の人々の精神的絆を意味した時、ローマ人の世界 (*orbis Romanum*) は、キリスト教徒の世界 (*orbis Christianus*) と重なった。この新たに統一された世界では、ローマは、それ故、ティベール河畔の町とは最早結びついではいず、あたかも、ビザンツであるかのように、キリスト教帝権とキリスト教会が共同することが、むしろそこでは生じたのである。ローマは、最早ロムルスの民とは関係がなく、別のキリスト教の民に代えられた。後にキリスト教の礼拝では、国家に対する祈祷で、*Imperium Romanum sive Francorum* (ローマ帝国並びに法兰ク帝国に) という式文を唱えることが出来た。ローマ自身に、なお普遍的な帝国思想を身に帯び、ローマの伝統の継承者として活躍するものが、もし存在したとすれば、それは、ローマ教会と教皇の座だけであり得た。

こうして、我われは古代世界の地から去った。この後の諸世紀を一瞥すれば、それは、ローマの帝国思想が、多くの後継者を見出し、後継者たちは、みな良く備えられていることを示しているが、それは、帝国思想の豊かさの遅ればせながらの証明である。我われは、その欠点をも見逃さなかったが、しかし又この思想が、あるとてつもない空間に秩序を齎し、多くの諸民族を支配する国民を助ける力になっていたことを、それに認めなければならない。この500年間、帝国は、諸国家の秩序に関する考えられる限りの最高の解決策を明らかに示した。この功績は、帝国思想の最奥の核心に、言わば、その責任の重さを自覚している支配と

いうもののローマ的理念に、我われをきっと連れ戻すであろう。もし、我わのが、短い言葉でImperium Romanumの設定目的を要約したいのであれば、ローマ理念の詩人であるウェルギリウスの最も有名な詩でそのことを叙べることが出来るであろう。

汝、ローマ人よ、国家と支配に思いを寄せよ
なれは、汝に相応しき技芸なるぞ、諸々の民に平安を齋し
敗れしものには、寛容を、そして高ぶるものには、赫々たる勝利を。

ローマ人の帝国思想に関する広範な文献から、以下に、部分的な問題はあるにせよ、いくつかの書物が挙げられよう。全体として入門的なことを扱かっているように見えるここでは、Imperiumとその構造、その解釈の理解を特に助ける新しい若干の著作を示すことで十分であろう。帝国の政治的な構造とその文化的働きについて、*M. Gelzer, Gemeindesstaat und Reichsstaat in der römischen Geschichte* (Frankfurter Universitätsreden 19) 1924, 同じく、*Das Römertum als Kulturmacht, Hist. Zeitschr. 126* (1922), 189ff, *L. Wenger, Von der Staatskunst der Römer* (Münchener Universitätsreden 1) 1925; *H. Last, Cambridge Ancient History XI*, 1936, 435ff; *W. Weber, Rom, Kaiserium und Reich*, Stuttgart 1937. 等を参照。Lastは、ローマの政治の実際を、様々な形で、一目瞭然に述べているが、*P. De. Francisci, Der Geist der römischen Kultur* (Veröffentlichungen des Petraca-Hauses. Dritte Reihe. Übersetzungen 3), Stuttgart 1941. は、一体化の要因として、ローマ人のゲニウスの建設的な理念を、一種の偏りとともに強調している。また、*Atti del V congresso nazionale di studi romani*, vol. 2, Rom 1940.に掲載された論考も参照せよ。ローマ帝国が、当然自分のものとして求めたが、服属者たちは、しばしば、異論を差し挟んでいた倫理的、文化的諸価値については、*H. Fuchs, Augustin und der antike Friedensgedanke* (Neue Philologische Untersuchungen

3), Berlin 1926. 同じく、Der geistige Widerstand gegen Rom in der antiken Welt, Berlin 1938.を参照。 古代の哲学的な一体化理念は、取り分け、その著書においてJ. Kaerstの大きな問題の一つであった。Die antique Idee der Oekumene, Leipzig 1903; Geschichte des Hellenismus, II² Leipzig 1926, 111ff. ; Weltgeschichte, Antike und Deutsche Volkstum, Leipzig 1925. 帝国思想の哲学的、宗教的因素は、またE. Barker, The conception of empire, in; The legacy of Rome, ed. By C. Bailey, Oxford 1923, 45ff.,が詳細に論じている。Imperium Romanumの中世期の帝国思想との結びつきに関しては、G. Tellenbach, Römischer und christlicher Reichsgedanke in der Liturgie des frühen Mittelalters (*Sitzungsberichte der Heidelb. Akad. D. Wiss.* 1934/36, 1)とそこに挙げられている文献を参照。その他に、Das Reich, Idee und Gestalt, Festschrift für Johannes Haller, Stuttgart 1940. 及び202ページ、註1に記されているものを参照。

出典； Joseph Vogt, Der Reichsgedanke der römischen Kaiserzeit. Vortrag gehalten bei Arbeitstagung des NSD Dozentenbundes der Universität Freiburg am 18. April 1942.
in : ders., Vom Reichsgedanken der Römer, 1943 Leipzig (Koeler & Amelang), 5-34.

訳者付記

ヨーゼフ フォークトのナチス期になされた講演、『Römischer Glaube und römisches Weltreich. Vortrag gehalten in der Wissenschaftlichen Akademie Tübingen des NSD Dozentenbundes am 4. Dezember 1940』に続く、講演の訳である。

Reichsgedankeは、国家思想か、帝国思想かと思ひ悩みながらも、主に帝国思想と訳した。それは、単に訳語の問題如何を超えて、Reichとは何か、というドイツ史の中心的问题にも連なる問題であることは、以下のクリストゥの論文からも明らかである。訳語として、適確かどうか、考慮すべきかと考えたものは、出来る限り原語を併記するようにした。なお、文末のウェルギリ

ウスの『アエネーイス』の一節は、原文ではR. A. シュレーダーの独訳であるが、拙訳では、岩波文庫版、泉井訳を借用している。

なお、上記講演は、四国学院『論集』 第124号（2007／12）、213－240ページに拙訳を載せている。今回以下に引用される場合、一部訂正した箇所もある。

これら二つのフォーカトの講演を論の中心にしつつ、このナチス期の他の古代史家の講演についても論じている①K. Christ、及び②Jürgen v. Ungern-Sternbergの論文の邦訳を参考として以下に載せる。クリストゥは、戦後ドイツ古代史学界の泰斗、現在85歳であり、ウンゲルン・シュテルンベルクは、バーゼル大学の気鋭の歴史家である。これらを併せ読むことによって、フォーカトの論文の特徴がいっそう理解されると共に、古代史家をめぐる当時の状況が覗かれ興味深い。更に又、戦後世代の後者のそれと前者の微妙な違いを感じられる。なお、訳文中の括弧で括られた数字は、原文に記された原著者による引用文等の引用箇所である。又、本来、ここで記すべきことも紙数上、省略せざるを得ないこと、それに、全体的に統一されていない点が見られるがお許し頂きたい。

- ① カール・クリストゥ、『ナチス期の帝国思想と*Imperium Romanum*』(Karl Christ, Reichsgedanke und Imperium Romanum in der nationalsozialistischen Ära. 出典；ders., Von Caesar zu Konstantin Beiträge zur Römischen Geschichte und ihrer Rezeption. 1996 München. 255－274)

I

1940年秋から1942年秋にかけて、第三帝国とその同盟国たちの軍事的勢力の絶頂期、世界的に広範囲に様ざまなことが起きたが、同時にヨーロッパ、取り分け地中海領域に包括的な新たな秩序が現われたように見えた。ボヘミア・モラヴィア保護領の設置、ポーランド占領地の総督領の設置、ソヴィエト連邦の分裂の表面的始まり、それにエル・アラメインまでの北アフリカの広大な土地の制圧等々が、この時期の諸段階と見做される。

この状況下で、多くのドイツの古代史家たちが、夫々の大学等で、沢山の聴衆たちを前にして、*Imperium Romanum*に関する講演を行ったが、それらは又、直に印刷され、頒布された。ブレスラウでのエルシント・コルネマン、チュービンゲンとフライブルグでのヨーゼフ・フォーカト、並びにライプチヒでのヘルムート・ベルヴェ等々のこれらの講演が以下の考察の基礎でな

ければならない。と云うのは、それらは、あらゆる個人的な強調点とか優先順位、観点とかを無視しても、国民社会主義時代のドイツにおける時代の衝撃と歴史的な評価の関係を、特に明白に浮かび上がらせているからである。

ドイツの領域での帝国思想の役割と機能についての簡単な前文から説明を始めよう。その場合、主に言及された学者たちの様ざまに異なった立場が、時間的順序に従って扱われる。国民社会主義のイデオロギーの諸要素が、夫々の判断に対しどのような役割を持ち、かつこれらの古代史家たちの価値判断は、どのような諸結果に導かれねばならなかつたか、これらが、取り分け、その際に明確にされねばならない。方法論的観点では、当該の者自身が述べたことに重きが置かれる。それ故、かなり長い直接的引用が避けられない。それから、最後に批判的に対比することが、諸々の結果からまとめられ、整理されるであろう¹。

この前文の終わりは、結局、現代史の史料としてのこれらの講演の重要性と独自性に関わることと言つてよい。今日、これらと我われを分けている遠い時間的隔たりから、これらの講演の専門的重要性は、部分的には取るに足らないものであつたり、又、少なからずの点で異論やら、時に決定的な拒絶を引き起こさせるに違ひなくとも、我われの問題提起の範囲内では、これらの史料的価値は重要なものである。何故なら、これらの各講演では、第一に時代の衝撃に関する直接的反応や、政治的な新たな状況の反響が扱われているからである。国民社会主義体制内部で、発言者たちには様ざまの任務が課せられ、それらは喜んで引き受けられた。従つて、こうしたテクストの時事性の度合いは、すぐれた歴史叙述のそれよりも、本質的に、常により高いものである。それ故、正にこれらの史料群に、今一度より詳細に取り組む必要があろう。

II

ドイツの高級な政治＝社会用語歴史辞典『歴史的基礎概念』の中で、ペーター・モロウ (Peter Moraw) は、『Reich』という項目を、この語は、〈恐らく、かなり古い国語 (Staatssprache) の最も複雑で、最も重層的で、最も見方の豊富な概念領域〉² と思われる、という確認から始めている。中世および近代におけるドイツ語の『ライヒ』概念の変遷に関する包括的な学問的著作も、またリチャード・ケブナー (Richard Koebner) にとって対の片方に過ぎない研究書『Empire』(Cambridge 1961) のいずれも、我われはご存知のように持っていない。たとえ、それと類比して、一方で、Imperium Romanumについての観念の体系的な考察が、他方で夫々の時代の指導的政治理念が追究されても、方法的観点から見て状況はなおいっそう複雑である。

それで、残念ながら、ここでは僅かばかりの指摘が出来るに過ぎず、せめても我われの主題の関係と範囲を概略述べなくてはならない。

*translatio imperii*とか他の継承観念の虜にされるとか、或いはそのような考え方に対する意識的な異論の中に、はっきり輪郭が描かれてきた帝国観念の継承ということは、周知のことである。ドイツ領域では、帝国観念は、《神聖ローマ帝国》の終末の後、既に解放戦争の時に、新たに現実化されたのであり、直ぐに様ざまの政治的、宗教的勢力によって保有された。帝国構想は、十九世紀には、ロマン主義的、キリスト教的な理念とも、民主主義的の理念とも関係づけられた。エリザベス・フェーレンバッハ (Elisabeth Fehrenbach) は、この点に関し、次のように正しく確認したのである、即ち、

1848年も、1866年から1871年も同じことだが、—1813年、国家的スローガンから発して・・・
言うまでもないが、あたかも宗教的聖別式に(因る)ような恍惚と作用、それが《ライヒ》という概念を取り囲んでいた。《ライヒ》の下で、常にまた神の国 (das Reich Gottes) が理解され、それは、父なる神への我われの祈願を意味していたのである。³

多様な内容と観念は、1871年、新たな政治的な帝国の創設の後にもまた存在し続けていた。このことが、ホーエンツォレルン朝の自己理解や、或いはそれから間もなく広範囲に現われた帝国主義的諸傾向を結び合わせたのと同じように、古い歴史的伝統とも結び合わせた。1900年、ヴィルヘルムII世がその演説で、新たなドイツ帝国は、<かつて、ローマ帝国がそうであったように、非常に強力で、固く一丸となり、そして非常に権威あるもの・・・にならなければならない>⁴と期待を表明した際、その新しい皇帝の眼前に、*Imperium Romanum*の範例は、たまたま彷彿と浮かんでいたのであった。帝国のこのII世が倒れると、最左翼の政治家たちは、ヴァイマル体制において帝国観念を回避しようとしたが、それは徒労に終わった。しかも、単に永らえただけでなく、帝国観念は、今や保守的な情勢の中で、新たに生き生きと甦ったのである。

帝国思想の中身の不一致が、一方で正に特徴であった。1923年に初めて現れたアルトゥール・メーラー・ファン・デン・ブルック (Arthur Moeller van den Bruck) の著作『Das dritte Reich』でもなく、既に前から、彼の運動に《das Heilige Reich deutscher Nation》⁵ を用いてきたアドルフ・ヒトラーのたまたまの表現でもないことが、全ての人々を制約するものとなっていた。とにかく、《ライヒ》は、既に早く国民社会主義のプロパガンダの中に統合されていた、一しつこくて、うんざりする程の物議を醸した決まり文句《一つの民族、一つのライヒ、一人の

指導者》。ヨーゼフ・ゲッベルスは、新しい、拡大された週刊誌に、毎週、論説を記していたが、その特徴というのは、タイトルに《Das Reich》と付けていたことだった。だが、この概念は、また全く別の主張をその内容に含むことが可能であって、取り分け、〈Deutschen〉から、〈Grossdeutsches Reich〉が生まれた時には。ドイツ語圏の歴史学は、《ライヒ》の基礎、伝統それに特性に関して一致させようと、たびたび努めたのであった。例えば、ハインリッヒ・リッター・フォン・スルビク (Heinrich Ritter von Srbik) は、第一義的に純血主義的であることに反対して、普遍的考え方方に立った。

国民社会主義は、このライヒという観念のインフレーションから、丸ごと利益を得たように見える。全体主義的国家の現実においては、僅かなものたちだけしか、その体制の非人道的目的とか手段を、いつでも都合良く覗き見ることが出来なかったから、ライヒ概念の広く、様ざまに異なった受け取り方は、国民社会主義の支配の安定化に対して少なからず寄与したのであり、ライヒ概念自体、国民社会主義的な生存圏イデオロギーの観点で、第一義的に民族主義的に、—《ライヒの我が家 Heim ins Reich》という定型句におけるように—、或いは権力国家的並びに帝国主義的に強調しても構わなかった。

ヒトラー自身は、これら全てを、意識的に未決定のままにしていたが、一方、彼は、*Imperium Romanum*に彼の敬意を表していた。1941年12月の国会演説で、《ローマ人の思考とローマの国政術》について、それが述べられていた。即ち〈その重要さと弛まず示された力において、今日なお匹敵せざる、いわんや越えられない世界帝国が生み出された〉⁶。これらの背景を前にして、ドイツの古代史家たちの以下の言説は見られるべきである。

III

エルнст・コルネマンErnst Kornemann [1868–1947] は、既に4年前に退官していたが、彼は、1940年10月24日、ブレスラウ大学のレオポルディナ大講堂で、『Das Imperium Romanum』と云う講演を行ったが、それは学際的な連続講演の最初のものであり、ヨーロッパの大広域と—その形成、を問題しているのがその特徴であった。⁷ 広範囲に古代史の様ざまなテーマを伝えるために、たいそう精力的に尽力した愛国的な枢密顧問官の講演は、彼の1938年、1939年に著された二巻の『ローマ史』を重要な箇所で挿り所としていたが、この著作は、ともかく二十世纪にドイツ語圏で最も広範囲に流布した総合的叙述の一つであった。

コルネマンによれば、ローマは、〈摂理によって、ヨーロッパ的内実を伴った最初の世界帝国

を生み出さねばならないという役割>(6)が割り当てられたとすれば、それは、先ず地理的諸要素によって促進されたが、取り分け<イタリア農民たちの健康な民族的公共心>(11)によって助長されたのであった。コルネマンは、彼独自のパトスを以て、情熱的に、

類まれな紀律とともに、最も重大な政治的責務を克服し、国家を道徳的高みにまで高め、そして、ギリシア人のペルシア戦争以来、その時に至るまで、ヨーロッパの人間たちによって二度と生まれなかつた市民層の無比の犠牲的勇気。あらゆる人生の緊張に向かい合つた健康で、分け隔てのない心情、そして、アフリカの獅子(=ハンニバル)の前足の殴打と、その下での216年のカンニーの恐ろしい日を克服した彼らの血管を流れる力に満ちた農民の血を持つ偉大な民族(ギリシア人のポリュビオスが述べたように、単に良い制度だけではなくて)であった。(11)

と称賛した。

だが、正にこの理想的に見られた農民層が、コルネマンによれば、紀元前133年以前、ローマの帝国主義段階で無力化された。即ち<古代国家の最も貴重な存在、その農民層が、世界支配の妄想のために・・・犠牲にされた>(15)。コルネマンは、そう彼は呼んだが、<イタリアが脱農民化 Entbauerung>に向かって、一同様に全く耳慣れない概念—<ローマ人の脱民族化 Entvolkung>(16)が、そして最後には、対外政策の誤った展開が進んだ。カエサルの暗殺は、<実際の広域空間形成を・・・、二度と不可能にしてしまった>(17)。

アウグストゥスに関するコルネマンの評価は、相反し、矛盾していることが知られている。⁸ コルネマンにとって、一方で、彼は、帝国を結果的に平和に向かわしめた<古代世界の最大の政治家>(18)であったが、他方で、<国内の最高の改革者は、対外政策では、上手くいかなかった>。その<平和政策は、基本的に大袈裟なジェスチャーであつて>—それ以上ではなかつた。<彼の対外政策は断念で終わり、民族の興隆は過ぎ、後退が始まった徵が、常に国民の生活の中に見られた>(20)。

<既に衰退が認められる帝国の歴史における最も深い断層線>を、コルネマンは、彼の意見では、<怠惰な平和主義が時代の徵>(21)になったハドリアヌスの下にみていた。それと共に、コルネマンは、軍事的問題に向かうのであるが、その問題に常に特別の注意をコルネマンは払っていた。彼によれば、インペリウムの中核は、<絶えず、かなり闘争能力を欠いたものに>なつた(22)。ローマ軍には、國家の内部に備えられている予備軍が欠けていると同様に、<深い編

成>が欠けていた。それ故、後期古代には、<かつての帝国住民にあった防衛精神が・・・明らかに崩壊していた>(24)。

また、コルネマンの最終的評価は、大まかに二極化された。世界帝国への興隆を可能たらしめたローマの農民層の神格化は、このようであった、

国家義務の定言的命令が、ローマ人のように国民全員によって、たいそう真剣に、文句も言わず実行に移されたことはかつてなかった。興隆期における彼らの偉大さは、それに因るのである(27)。

だが、紀元前二、一世紀の展開が、そのことと対照させられた。<昔の農民層が、・・・一コルネマンによれば一戦争に伴う過重な負担な結果として減少し始め>、イタリアは、<次第に彼らの最良の市民層と農民層の移住によって弱体化され>、今や奴隸の流入の強化という傾向の中で、<あらゆる土地出身の外国人たちが、絶えず増え、帝国の中心的領域に>浸透していた。<人種の混淆と人種の悪質化が、結果的に現われ、帝政期には、古き農民的ローマに対し、奇妙なごた混ぜの民族が取って代わった>(28)。

衰退の社会的、経済的及び宗教的諸要因には、コルネマンは、次いで軽く言及するだけである。彼は、<国家の社会的動脈硬化>を指摘したが、さらに、国家の権力構造並びにローマ経済のそれは、表向き<変わっていない>(29)ままであるということ、<レースプーブリカ>の理念自体は、確かに忘れ去られてはいなかつたが、国家の<より深い内実においては、最早理解されていなかつた>ということを指摘した。次いで、*Imperium Romanum*の政治的伝統のその後を展望して、コルネマンの講演は終わった。

たとえ、全体に目を向けたとしても、これらの論述は、例えば、全く一面的であれ、マックス・ヴェバーが、かつてそれを試みたような、⁹論理的に信服させる厳密な分析も、さらに継続的な新たな思考も示していないかった。それらは、ただ修辞的に印象的な方法で、その当時の<一般的意見 communis opinio>の形式的視点の概略を提示したに過ぎなかつた。けれども正に、こうしたご立派な特徴の中にこの論述の意義もあつた。ローマの農民層の理想化と共に、コルネマンは、ここでは、ニーブールに拠っていた。¹⁰それから、ローマ的なるものの道徳的な様ざまの属性や、ローマ共和政期の古典的な神々しいレース プーブリカ像が、表に現れていた。別の言葉を以てすれば、コルネマンは、20年代、30年代に、特にリカルド・ハインツ、マティアス・ゲルツァー¹¹それにヨーゼフ・フォークト等に見られたあの独特的調子を受け継いでいた。それを、ゲルツァー¹²¹³

の巧みな表現で言ってみれば、<帝国的国家ではなく、共同体的国家が優位を占めていた>。

コルネマンは、略ただローマ的・イタリア的背景からのみ、その全展開を見たために、世界帝国自体には、価値を置かなかった。コルネマンの様ざまな現象や、その展開の説明から結論がもし引き出されるとすれば、この世界帝国を生み出したことと、その後に続くものに対する称賛は大変大きかったということである。コルネマンは、またその拡大のダイナミックに感嘆していたけれども、彼は、この点ではアウグストゥスよりもカエサルに上位を与えていた。¹⁴ 同時代人の期待に、彼の防衛力とか防衛精神の力説は応えるものであった。また<民族的>視点と人種理論の個々の常套句の受容が、一方で正に安易になされていた。コルネマンのような比較的独立的な保守的－愛国的学者もまた、その当時のスローガンに対して免疫を保っていなかったということを、やはり、この受容が明らかにしているのである。

IV

ヨーゼフ・フォークト Josef Vogt [1895–1986] は、彼の両親の下で、深くカトリックの影響を受け、テュービンゲン・ヴィルヘルム奨学金の給費生として、先ずカトリック神学の研究を始めた。¹⁵ 第一次世界大戦から帰還後、彼は、古典文献学と考古学に向かった。けれど、フォークトの宗教史的関心は、あらゆる初期の研究の中に強く存在している。それどころか、その点が、この学者の全著作を決定づけている。ローマ史では、フォークトの研究は、先ずローマの帝国主義の問題に集中した。¹⁶ その第一行で、<帝国主義者>とされたタキトゥスについての初期の研究にとって、この問題は、ローマ政治の基本概念のための研究に対してと同じく重要であった。

ローマ政治の基礎的範疇と思考形態に関する個々の研究は、フォークトによれば、<ローマ帝国主義の思想的根拠の詳しい説明>を扱うべきであった。¹⁷ —我われの専門領域の多くの目的の一つであり、よく知られているが、全く実現されていないことであるが。我われとの関連でこの領域からの最も重要な著作は、依然として、初め1929年に著され、後に繰り返し再版された研究『Orbis Romanus』¹⁸ であった。そこで、フォークトは、次のように指摘することが出来た、即ち<ローマ帝国は、人間世界全体 (oikumene) を包括している、という思考は、ギリシア的考え方であるが> (154)、その考え方とは、既に紀元前二世紀には広がっていた。彼は、さらに、既にキケロにおいて、ローマの統治範囲は、地上世界 (orbis terrarum) に対応し、そこではローマの世界支配は<地上世界の保護的支配 patrocium orbis terrae> 《de officiis, 2,27》として理解されていたという点を忘れないように注意を促し得た。ローマの権力構造とローマ支配のこ

の初期の理念的理解は、次いでまた、1932年に出了彼のモノグラフ『ローマ共和政』の主旨をも決定していた。この考え方を受けたあらゆる批判にもかかわらず、惑わされず1973年のその最新版でも、共和制後期時代以来のローマの＜世界への保護責任＞の存在をフォークトはなお確固として保持していた。(1973⁶, 9)

フォークトは、またナチス期に出世したこと、さらに彼は、ヘルムート・ベルヴェとそのことで競い合つたのであったが、古代史にナチス的人種イデオロギーの重要な諸要素を適用することをかなり長い期間試みたこと、これらのことは周知のことである。『ローマ帝国における人口減少』(1935)、それに『ローマ帝国における人種混淆』(1936)と云う論説、『古代に対する我々の立場』(1937)と云う講演、そして最後に、矛盾を藏した共著の出版『ローマとカルタゴ』(1943)²⁰等々は、この方向における最も問題となる仕事であった。

ここでは、詳しく述べられ得ない別の沢山の仕事と並んで、フォークトは、ローマの政治の前提条件、基礎構造それに指導的理念をめぐる諸研究を継続していた。いわゆるローマ帝国主義の格律「divide et impero」を、1940年、ハラー献呈論文集で、次いでまた、1942年の『新しい古代像』では、疑いなくカール・ハウスホーファー(Karl Haushofer)の地政学的見解に興味をそそられ、『ローマ政治における領域把握と領域秩序』を論じていた。²¹同じく1942年に出版された論文集『ローマ人の帝国思想について』の中には、フォークトは、これらの諸研究と、『Orbis Romanus』の新たな改訂版と共に、1940年と1942年の二つの講演『ローマ人の信仰とローマ世界帝国』と『ローマ帝政期の帝国思想』を入れていた。これらは、帝国思想と*Imperium Romanum*の評価の相互依存の中心に導いてくれるが故に、ここでは、これらのものにいっそう立ち入らねばならない。

講演『ローマ人の信仰とローマ世界帝国』は、1940年12月4日、＜チュービンゲン科学アカデミー・ナチス大学教員同盟>で持たれた、つまり、あらゆる分野の大学教員のための公的なナチ党組織の所属員たちの前でなされたのである。フォークトは、そこで、確かに現代とローマ帝国の歴史的関連から出発して、それに対し、全く観念的に、＜ローマの世界支配との隔たり>を率直に力説していた。

*Imperium Romanum*の最終形態は、支配民族が被征服民族を支配する包括的な組織であつた。帝国内の諸民族は、ローマ世界の文化、平和、経済組織を享受していたが、国家自体の協同ということは、全くなかった。帝国は、諸民族の共同体でも国家連合でも、決してなかつた。そこに実際存在した広域は、今日新たに秩序を打ち立てるべく立ち向かっている空間と、

恐らく等しいものである。・・・しかし、今日形成されつつあるこの大広域の秩序は、諸国民の固有の生活規範に適った基盤の上に生まれるに違いない。指導的国家の中から、その領域内では異質な諸権力が遠ざけられる帝国が誕生する。要するに、その領域に組み入れられる諸国家は、その従属関係の中で自ら固有なものと、自由の保障を保持していくのである。

(118f.)

フォークトの基本的問いは、即ち<ローマ人の信仰、ことにローマの国家宗教とローマの権力政治ならびに帝国の形成には、どのような関連があるのであろうか>(119)というものであった。彼は、その際に、この関連が、従来研究によってほとんど顧慮されて来なかつた、ということを確認するだけではなく、彼自身のローマ共和政の説明の中でも、<ローマの政治の宗教的基盤が、不十分にしか描かれていなかった>と認めていた(119)。特に、彼は、<ローマの帝国主義の一一般的描写は、ローマ人の信仰をほとんど知らない>(119f.)と書き留めていた。フォークトによれば、

宗教的信仰や供犠との本質的な結合を、まったく放棄してしまっている現代諸国家の現実世界とは異なって、古代世界のあらゆる政治的創造物にとって、あらゆる人種の相違にもかからず、彼らは、彼らの生活を神々と共に営んでいた、即ち、部族の、民族の、あるいは都市の神々と共に、或いはこの世ならぬ様ざまな力と共に、人々の民族的流儀を守り高める生活を営んでいた、という規範（は有効である）(120)。

と彼は強く教えていた。

ローマ人の神観念と信仰的姿勢の描写は、それ故、<ローマ人の信仰から、大国と世界帝国にいたるローマ民族の経過を推察する>(121)方向に導くのが当然であった。フォークトによれば、その場合、ローマ人の神理解の<特殊性 specificum>が存在した。ローマ人は、<神的なるものを、あらゆる出来事を貫いている驚くべき威力として（理解した）>(122)。彼は、特別な関連の中で、さらに国家と宗教の極めて緊密な離れがたい関係を明確に強調していた。

古代世界において、このように包括的方法で国家的に神々の崇拜を行つたポリスは、一つとしてない。個人的誠実さは、ここでは全く問題とならない。しかし一方で、宗教的救済が示されることのない国家的関心事というものも全くなかつた。その場合、政治的指導者は、同

時にまた共同体の説教者であり、コンスルとして前兆を觀察し、犠牲を捧げ、或いは自身が聖職者団体に加わったが、それは長い間貴族たちの特権であった。国家のこうした政治的指導と宗教的指導の結合を、ローマ人は祖先の最高の知恵として受け取ってきた。しかし、とりわけ神々の意思を解釈するその奇妙な形式、また權威ある方法という点で、ギリシア人にもゲルマン人にもまったく見られないものであった。神的なるものに、絶え間なく訊ねるところが求められていた。ローマの都市建設者ロムルスの鳥占いから、一高級政務官の最後的行為に至るまで、《神がそれを欲している》という言葉で説明される。この言葉が、数世紀に亘るローマの政治の根本的モチーフを示している(124f.)。

このような背景の中で、政治的役割が、土着の神性に対して、また新たに導入された神性に対しても強調されたのであった、特に、レースブーブリカの内と外での、ローマ人の良心的義務と法的拘束力における<信義 Fides>の尊崇が強調されたのである。

<ローマ国民の信義 Fides populi Romani>は、ローマ神官たちの自己正当化のための発明ではなく、神々の生きた力であり、それがローマの偉大さと出会い、数世紀に亘る信頼へと他の諸国を向けていったのである。ローマ国民の信義こそが、他の諸国民にローマに依存し、服属することに道徳的価値を与えると共に、ローマを指導国家として、受託者として、また伸展していく国家として歩ませることになったのである。この形式の中で、ローマの要求、言い換えれば秩序正しい諸国家の世界の建設を通じて道徳的指導の遂行を目指すということが、明確になる。しかし、ローマの同盟国や服属国の側に歩み入れば、諸国家を良心的に支配していると認めることには抵抗があった。しかし諸国の信頼できる証拠に依れば、少なくとも基礎を造ったローマの創生期には、ローマ的信義が祝福されていたのであったが(131f.)。

他方で、フォークトによれば、ローマの指導層の場合、ローマ人の<信仰深さ Pietas>の政治的次元は、神々は信義のこの無比なる熱心さに対し、ローマの権力政治の諸々の成果を以て報いるという確信に立ち至ったのであった。彼の評価は次のようにある。

ここで、力に溢れた国家が、神々を崇敬し、神々の意思を尋ね求めることで、歴史を貫く方途を、確保したのである。この淫刺とした国民は、他の国民よりも神的なるものをより深く

洞察し、かつより密接に結びつくことが可能であると自負した。こせこせした祈祷ご利益主義と同様に、神的なるものに対する卑屈な恭順とは遠く隔たり、彼らの信義にこそ、その身の安全と力の汲みつくせない源泉が存在していたのである(143)。

英國と日本の使命觀とローマのそれとの不十分な対照が、アウグストゥスがそのための土台を築いた帝政期の發展に話を移行させた。

国家建設者のこうした神秘的能力が、国家指導の新たな形式として、帝国の一つの本質的要素になったのである。単独で包括的なインペリウムを占有したプリンケプスは、また最高の鳥占いの権利を有していた。彼が、何らかの行動の実行を、誰か委任者に委託するような場合、神々の意思が求められた。また、必勝の気に満ちた出征の後には、彼の軍団は当然の勝利が要求されたに違ひなかった。彼は、一人で神々の恩恵を媒介したのと同様に、彼は、自身単独でローマの神的勝利の力を帯びていた。皇帝のうちに勝利が存し [Victoria augusti]、皇帝のうちに平和が存し [Salus Augusti]、皇帝のうちに帝国の永遠性が存し [Aeternitas Augusti]、これらが、まさに皇帝崇拜の前提であった(157f.)。

こうした見方からは、フォークトは、またローマの宗教的な支配者崇拜に特別の価値を置き、その場合確かに、東方の密儀宗教の浸透もキリスト教の浸透もいずれも阻止し得た皇帝崇拜に、正に＜国家宗教への手がかり＞(161)を見ていた、ということが理解されるのである。コンスタンティヌスの宗教政策と四世紀末のローマ元老院におけるヴィクトリア祭壇をめぐる出来事の展望を以て、フォークトの論議は終わっている。

およそ1年半後の1942年4月18日、フライブルグ大学のナチス大学教員同盟の研究会議期間に『ローマ帝政期の帝国思想』²³と云う講演を、フォークトはさらに行つた。様ざまのライヒ観念の歴史的諸関連に注意を向けさせること、及びフォークトの《ライヒ》の理念的な理解に特徴的である定義を試みることに彼は努めていた。

固有の政治的構造の諸々の相違にも拘らず、また同時に帝国概念の相違にもかかわらず、厳密に言えば、我われにもまた妥当するその評価において、それは、古代とヨーロッパの共通財産の一部なのである。広大な領域に住む多くの諸国民に対し、権力とその職責の問題を絶えず統制し、広範囲な影響力を振るった政治権力の存在 [Dasein] を、帝国にとって本質

的なものと、我われは考えている。この体制の構造には、精神的な絆が働いていなければならぬし、一つの目標が明確にならなければならない。物質的な構造の仕組み以上に、部分は、全体からその生の安寧を獲得するに違いなく、かつ部分は犠牲を払うことの意味を受容するに違いない。このように帝国は、その広大な空間の力と精神の統一したものであることが明らかになっている(5f.)。

*Imperium Romanum*に関して、全き感嘆が書き留められた。<ヨーロッパの地においては、この様に包括的で、密度の濃い組織は、二度とその後達成されていない>(6)。ローマ帝国の構造についてのフォークトの評価においては、既にこの講演で述べられていた理想主義的見方が全体に優位を占めて、全く素気なくしか否定的見方は論じられなかった。

ただ搾取するために土地を占有したり、支配のための支配を、ローマ人が密かに心中欲する時代が、確かにローマの歴史にはあった。だがそうした流血の侵略の時代は過ぎ去り、その支配本能が、ローマ的なるものの政治技術を高めるのに寄与したことは明らかである。全体的に見れば、ローマの戦争指揮は、自らの財産を守り、また外国の不法からの防御として、ローマの実力行使は秩序を目的とした職務として見なされていたのであり、それは、責任感に溢れた指導の結果から現れたものであった(8)。

ほとんど皇帝称賛演説のように、フォークトは、さらにアウグストゥスの帝国秩序を賛美している。彼によって、<将来に亘る支配権力の義務意識を回復した>のであった。このアウグストゥス時代の世界支配に、彼は、<諸々の土地を守り、管理し、かつ維持するという正当な行為>を見ていた。ローマは、再生され、<諸国民の支配という神により与えられた使命に相応しいものになる>(11)ことが出来た。ローマにおいては、<属州の服属民たち>は、<誠実に保護されなければならない被護民>(11)であると、フォークトは、さらにまた認めていた。ローマと属州民との関係は、いわゆる仕事とその給付というバランスの取れた制度によって決定されており、ローマの国家構造は、地域の伝統への敬意、平和の確保、活気ある交通、都市共同体の振興、そして属州の指導層たちを帝国の行政的諸課題のために用いること等々が、特徴として示されていた。<帝国内の人々の精神的絆>として、フォークトは、何より<ストア哲学の人類理念>(29f.)を指摘した。一方で、彼は、ローマ帝国は、<世界の自然な推移>の結果であろう、という観念と共に、また帝国思想における<非歴史的要素>(22)もまた強い調子で語っていたのであり、帝

国は、<満ち足りた世界の理想像>(24)とされ、一種の<静止的なもの>ということも示唆していた。それにもかかわらず、

ローマの帝国思想は、様ざまの厳しい批判にも持ち堪えたのだった。その思想の最も安定した精神的支柱を、絶対的なるものとの宗教的な関係が確かに常に築いていたが、それは、神々の意思に基づき、勝利と力と国民の統治は、確実に神的起源を持ち、神の恩寵を十分に与えられたものであるというローマ人固有の考えに、支配を導き戻すものであった(24)。

という考え方を、彼はしっかりと保持していた。

この第一に宗教的捉え方の基本線の描写では、さらに、帝国理念と皇帝理念が相互に緊密に結合された。

この使命信仰とローマとの結びつきは存続し続け、都市ローマが、帝国の中心であるだけではなく、皇帝の所在地であってから、なおいっそう緊密であった。というのは、皇帝に、今やローマ権力の宗教的基盤が凝縮されており、皇帝権に、魔法のように煌く噴水の演奏のように、多くの諸国民の様々な思考が一つに統合されていた。ローマ人は、彼らの第一人者プリンケプスを、特別に神聖で、力を保持する者として、とりわけ、勝利の仲介者として崇拜していた。ギリシア人は、理想的支配者に対する信仰、かつ共同体で創造的な活躍をする人間の神格化である皇帝崇拜に、贊助金を払った。また、皇帝は、このように神々に由来し、古代エジプトのファラオのように神王であり、その国家は、溢れる恵みと世界の平和を保証するであろうと云う見方が、オリエントから齋された。アジアにおけるアウグストゥスの支配は、善き知らせの始まりとして歓迎され、幸いを齋す神の子という観念が、ヴェルギリウスにより西方に伝えられて以来、皇帝理念に神秘主義の傾向が入り込み、ローマが政治的に没落しても、この理念自体は、消滅すことなく長く存続した(25f.)。

この複雑な皇帝理念は、また長期間、最も重要な帝国思想の支えであり続けた。軍人皇帝時代すら、

こうした皇帝なる人物たちが消耗される最中にも、皇帝権の尊厳性は、なお存していた。この好戦的な世界の何処かに、救いがもし望まれ得るとすれば、他ならぬ昔の英雄のごとく、

新たな先駆者自身であるこれらの君主に、彼らの兵士や農民の信頼出来るこの保護者に期待されたのであった。あらゆる不安と暴政にもかかわらず、又オリエント的な専制主義の受け売りであるにもかかわらず、皇帝の日々は、なお克己であり、職務であった。もしも我われが、帝国文化の記念碑、或いは皇帝の布告の前書き、国家の貨幣表とか或いは専制君主の名前か権票を調べてみれば、至るところで、国民の信仰が生み出し、帝冠と緋色の外衣を身に着けた全ての権力者が受け継いできた皇帝理念の証拠に、我われは触れるのである。即ち、林立するシンボルと、神の恵みを与えられた君主と彼の目出度き国民統治を告げ知らせている本当に長々とした懇願と約束の言葉(26f.)。

もちろん、フォークトは、また<後期古代の世界像と政治的現実の間に開いた深い裂け目を>見損なうことはなかった。

自由なゲルマン人たちが、侵入開始の主導権を握っていることを日々思い知らされる間にも、世界を包括する帝国について語っていた。人類の黄金の時代が、夢見られ、そこでは、ローマの皇帝は、決して制圧されない東方の国の君主によって、敵対者として打ち負かされてしまう。ローマ人の美德が寿がれたが、ロムルスの子供たちは、今や世界の多くの血の流れの混じった混血たちであると無視され、畏敬の念を起こさせた名前は、今や唯の空虚な言葉の鞘に過ぎず、かつてあのように生命力に溢れたかんばせは、仮面のように硬直し、文化的活力の衰退を特徴的に示している幽霊のような傾向を、その生活が表していた(28)。

ローマ帝国に対するキリスト教の位置と*Imperium Romanum*の記憶の存続についての簡略な展望は、ローマ帝国思想の僅かな総合的評価で終わっていた。

我われは、その欠点をも見逃さなかつたが、しかし又この思想が、あるとてつもない空間に秩序を齎し、多くの諸民族を支配する国民を助ける力になっていたことを、それに認めなければならない。この500年間、帝国は、諸国家の秩序に関する考えられる限りの最高の解決策を明らかに示した。この功績は、帝国思想の最奥の核心に、言わば、その責任の重さを自覚している支配というもののローマ的理念に、我われをきっと連れ戻すであろう(32)。

フォークトの位置は、我われの関連の中では、非常に重要で、啓発されることが多いものであ

る。というのは、その時その時、支配的なその時代の理念を自らの専門に適用し、その場合に、にもかかわらず高度の学問的水準を守るのに自ら大変な緊張を強いられながら努めている一人の若い名誉心に富んだ専門家が、彼において問題であるからである。フォークトの立場は、それが、第二次世界大戦後には、ローマ史の全分野に、ドイツ語圏をはるかに超えて考えられる限りの大きな影響を与えるはずであったから、それ故さらになお重要である。

フォークトの場合には、始めから精神史的背景とか宗教史的関心が優勢であった。このことが、ローマ共和政の分野で先ず、ローマの政治の宗教的な理想化に導いていった。即ち、<ローマ国民の信義>の彼の神格化は、殆んど超えることが不可能である。フォークトの方法と見方に対して、彼は、一方でカール・ハウスホーファーの地政学的思考に影響を受け、他方、<ローマ国民の服属民や同盟者に対する保護責任>というキケロのテーゼを、最も深く理想主義的に受け取ったことが指摘される。ローマの政治の基本的概念とイデオロギー的言葉を歴史的現実とフォークトが同一視していることが、一般的な発見手法的な問題性を確かに投げかけているが、そのことは、歴史的意味論や概念史の最新の諸研究でも、必ずしも常に注意が払われているわけではない。

フォークトの努力の成果は、にもかかわらず帝政期の*Imperium Romanum*に対するローマ人の諸々の関心の全く一方的な弁護に過ぎず、タキトゥスよりもリヴィウスに、どちらかと云えば繋がる歴史叙述であった。フォークトは、ローマ人の帝国思想を、いわば、哲学的に基礎づけることを試みようともしたのではあったが、彼は、しかし先ず何よりも、その考え方の宗教的基礎に拘泥した。帝国の彼独自の定義は、全く観念的に予見されていた《大広域圈秩序 Grossraumordnung》の要請と一致していた。特に帝国主義の諸問題と取り組んだ一人の若いドイツ人古代史家の政治的観念が、その当時、いかに無邪気で、非現実的であったか、後から顧みれば、正にうろたえてしまう。フォークトの場合、ドイツの権力領域に、即ち《大ドイツ帝国 Grossdeutschen Reich》の勢力圏内に含まれた諸国民が、<彼らは、彼らの独自性の保障と彼らの自由の庇護を手にする>²⁴であろうと言われていることを顧慮したところで、今日では、殆んど冷笑しか起こさないであろう。

V

ヘルムート・ベルヴェ Helmut Berve [1896-1979] が、ここで詳しく考察されるならば、それは、一見意外かも知れない。²⁵ しかし、取り分け2巻本の単行本『アレクサンドロス帝国とプロソポグラフィッシュ的基礎』(1926)と同様に2巻本の『ギリシア史』(1931, 1933)によって20

年代、30年代のドイツにおける指導的研究者として著名であったベルヴェは、ローマの歴史にも関わっていたが、それはアカデミックな学問においてだけではなかった。既に初期のライプチヒ時代に、彼はローマ史に関する一連の纏まった研究を公刊していたが、その重点は、後期共和政の段階と、並びにアウグストゥスの下での*Imperium Romanum*の強化にあると指摘されていた。

ベルヴェの観点と価値判断の評価をする場合には、最初に彼の『ギリシア史』の方向理念、特にヘレニズム時代の方向理念が注目される。又、一連の後期ローマ共和政に関する研究とアウグストゥスの元首制に関する研究では、彼にとって、先ず個人主義化の現象、伝統に繋ぎ止められている貴族制の解体現象、より強大な個人の興隆現象、国家的秩序の崩壊が、並びに宗教的勢力の動搖と新たな国家形成の輪郭の間の関連が問題であった。

ベルヴェの優先順位は、1931年の彼のスラ研究で歩み出していた。彼は、独裁官を全く<奔放ではあるが、しかしながら非常に深く根を下ろしている紀元前一世紀のローマの貴族>集団の中に位置づけていた。スラは、ベルヴェにとって、その<最大の代表者>²⁶であった。しかし、スラは、ローマの支配階層のヘレニズム化の進行を承認しなかったので、<その意味で、非人間的なるもの>に留まっていた。²⁷一セルトリウスの場合には、ベルヴェは、アドルフ・シュルテン (Adolf Schulten) の理想化された見解に反対して、既に2年前に異論を差し挟んでいた。即ち、この人物は、イベリア的ローマ的国家を建設したかったのだと。ベルヴェは、セルトゥリウスに、何より自分の個人的利益を代表していた単なる大逆人を見ていた。²⁸それに対し、皇帝アウグストゥスの場合には、ことは全く正反対であり、ベルヴェは、より広い読者層に対する小さな単行本を、²⁹1934年彼に捧げた。³⁰

ヴィーラントの伝説における若い権力政治家オクタヴィアヌスと後の<第一人者>アウグストゥスとの間の深い裂け目を、彼は、そこで強調していた。紀元前一世紀における<新ローマ主義 Neuromertum>という彼の構想は、オリジナルなものであった。ベルヴェによれば、<ギリシアの教養力 Hellenistische Bildungskraft>が、このローマの指導者階級に属している者を、

独自の個性の自覚と発展へと導いたのであった。・・・その時代の様ざまな力から生まれ、しかしながら、父祖の時代からの諸々の伝統によって強められ、そしてその形式においてのみ、ローマ的感性が、理想的なるものを都合よく生むことが出来たのであったが、この新ローマ主義が、その眞の政治家が期待したに違いない重要な精神的運動を演じたのである。オクタ

ヴィアヌスは、スケールの大きな政治家であることは、彼が、それを期待したその振る舞いによって、初めて明らかになった(409)。

ベルヴェは、実際また、歴史的経過を彼が叙述する際には、この＜新ローマ主義＞の衝撃と影響を抑え気味にしなければならなかつたにもかかわらず、アウグストゥスの元首制について、彼は自らの理解を一貫して固守していた。アウグストゥスの＜アウクトリタース auctoritas＞においてすら、ベルヴェによれば、＜新ローマ主義イデーが、実際に、一つの観点という以上に占めていた＞(426)。取り分け、彼は、帝政期の*Imperium Romanum*の概念は、その新ローマ主義イデーによって形成されていると理解していた。

いかにか、アレクサンダーに、またカエサルの休み無き精神に生氣を吹き込んでいたヘレニズム的な世界支配をめぐる努力は、憶測されているその世界領域を自らの支配権力で満たそうとし、果てしなく夢中になった。アウグストゥスによって形成された帝国から生まれたローマ・イデーは、反対にインペリウムの境界に従って世界を決定し、いわば、この輪の外側に存在せる全てを認めなかった。新ローマ主義が生み出した最も誇り高い思考の一つがこれであり、それは、同時にこの運動の内的活力を殊のほか証明している思考である。この力が、国家に対し単に平和、安寧のみならず精神的一致と自覺を齎したのであり、この自覺なしには、国家を内的に新たに作り上げることが、中途半端に止まってしまったであろう(433)。

1942年10月29日、枢軸国それに又日本の軍事的成功の絶頂期であったが、ライプチッヒでドイツ＝イタリア協会の記念式典が催された。当時ライプチッヒ大学学長であり、＜ドイツ古代学の戦時代理人＞であるベルヴェは、『*Imperium Romanum*』と云う講演を、その機会に行なったが、それは直ぐに印刷され頒布された。³¹ベルヴェは、以下のように始めた。

世界のかなりの地域の再編が、今日、軍事的政治的分野で枢軸国に課している巨大な様ざまの課題の中で、地中海領域の新たな形成が、突出した位置を占めている。それゆえ、このドイツとイタリアの友情と同盟に染まっている今宵、ファシズムの精神と首領(Duce)の行動力がイタリア国民に対し立ち上げた目標、即ち、強大なるイタリア的インペリウムの基を築くという目標に対する我われの特段の関心を表明するのは全く相応しいことであろう。

そこでは、崇高なる過去の伝統に自覺的に結び付けられ、かつ又、我われも、開かれてい

る可能性と将来の展望に対して目を向け、歴史が示している地中海領域の比較を絶したその秩序の先例に、また世紀転換期の数世紀、地中海域の諸々の土地に対する *Imperium Romanum* の建設に、不本意ではあるが、一瞥的歴史的考察を加えよう。たとえ、今日イタリアが、その国民の突き進んでいく諸々の力と、その地理的位置の異論の余地のない正当さに基づいて、地中海における指導的国家であるとその主張を唱えるとしても、無比なる支配本能を持ったローマ国民が、かつてその同じ領域に作り上げたその前提と説得力、その方法と手段、またその秩序の生成発展と歴史的運命を調べれば、我われには、それが心から理解されるのである(3)。

その主題のこうした今日性の後に、ベルヴェは、*Imperium Romanum* の形成に至った歴史的展開の輪郭を主に、しかし全く個人的な偏りを伴ってはいたが、描いたのである。彼は、地理的要因と並んで、取り分け生物学的要因に決定的重要性を置いていた。ローマ国民が世界史的使命完遂のための本質的基盤を、<あらゆる指導者の地位の主張は、その指導的国家の生物学的優越性を要する>(6)と云う、いわゆる知らず知らずの<時代認識>に劣らず、彼は、<ローマ人、ラテン人だけではなく、イタリアの全てのインド・ゲルマン民族の本来的に健全な民族性>(4)の中に見ていた。その一方で、<中庸で生粋のイタリア人性という民族的実質がなければ・・*Imperium Romanum*は、内にも、外にも維持できなかった>(21)。

<天性の支配者本能>(9)のみならず、取り分け、殊に紀元前一世紀におけるローマ貴族たちによる<ギリシア哲学の倫理学>の受容が、ベルヴェによれば、ローマの帝国政治に決定的輪郭を与えたのであった。

プラトンと彼の後継者たちの国家哲学の思想、ストア学者たちの国家秩序の教説、むろん後期ギリシアの、要するに世界主義的思想等は、支配を責務と理解せしめ、元老院貴族である多くの指導的人物たちに、支配下の諸々の土地と住民に対する、これまで知られていなかつた責任感を今や呼び起こしたのである。不当にも殆んど注目されないポンペイウスは、ースラとは幾らか対照的に－このような責任感の格好の例として挙げられ、その場合、彼は全ての住民たちの安寧のために、全地中海の海賊たちに対し一種の国家的死刑を果たしたのであり、彼以前のローマ政治が、西洋的連帯感の思想を全く欠いていた際に、オリエントの強力な諸国家に向かって、ギリシア的基本原理の擁護者であることを、自らアジアで示したのであった(13)。

ところでペルヴェによれば、何より、

四十年を超えるアウグストゥスの統治は、入念で、しかも断固とした行動で、数世紀間にわたり存続した地中海世界の見事な秩序を打ち立てたのであるが、我われが、《Imperium Romanum》、《ローマ帝国 Römischen Reich》と云う際に、実はその秩序を意味しているのである。西暦紀元後以降、ギリシアの影響下、その最良の力と意識されるようになつたローマ主義の精神である単一の精神が、その下に服している諸民族の多様な大衆を捉え始めたことが、・・それゆえ決定的に重要であった。膨大な人種的に同一の民族に対して、脱民族化する代わりに、ローマ人が民族の世界史的使命を理解し、そのために行動する程までに、何より民族感情をより十分に解放するに至らしめたギリシア精神の形成力は、力のあることが、初めて真に明らかになった(14,15f,19)。

*Imperium Romanum*の成し遂げた成果についてのペルヴェの評価は、しかしそのようなものであった。

つまり、稀に見る、崩壊してもなお驚くべき豊かな文明的栄光をあらゆる面で増進せしめた*Imperium Romanum*の優れた公正さとその統合能力及び防御能力によって、帝政期ローマの秩序を、それは保持していたのであり、そこでは、かつて服従させられていたが、今では単なる政治的な愛国心どころか同等の権利を持つものにまで高められた諸民族を生み出した。そのことが、彼らにローマのインペリウムの秩序は、開明的な人間的秩序であろうと云う意識を、何世紀にもわたって植え付けたのであった(19)。

ただこの*Imperium*の発展のうちに、外国の諸宗教に対するその寛容さは言わずもがな、無頓着さのうちに、ペルヴェが認めたのは、次の点であった。即ち、

ローマは、共和制期の素朴で、厳しいが、しかし民族主義的な強力な支配に代わって、責任を自覚し、民族を庇護する国家統治を行つて以来、自ら弱体化したと云う真の悲劇・・・イタリアは、様ざまな具合に沈滞し、一方ローマの世界平和の現れの中で、属州は繁榮し、発展していくながら、*Imperium*は、ますます心臓なき身体になってしまった。212年のセム系

の皇帝カラカラの法、所謂*Constitutio Antoniniana*は、全ての自由な帝国住民にローマ市民権を付与したが、*Imperium Romanum*にとって、それは、それが基での完成と解体を同時に意味していた(21)。

ヒトラー自身の短い1941年12月の見解をさておくとすれば、ベルヴェの1942年10月のライプチッヒの講演は、ローマ帝国に関するナチス時代のドイツを代表する者の最もむき出しの、いわば公式の見解である。小著『皇帝アウグストゥス』との密接な関連は明白であり、ベルヴェの考えは、確かに言及する場合、意外なものである。何故なら、基本的に、彼には、古典ギリシア哲学から、あの後期ヘレニズムのそれを経て＜新ローマ主義＞—このはっきりしない概念自体、1942年の講演では最早用いられず、現象自体を、その代わりに改めて強調していた一に至る決定的に重要な精神史的発展方向が延びている。その上、＜新ローマ主義＞の精神が、そこでは、*Imperium Romanum*を満たしていた。このように、明らかに、純粋にローマ的規範や伝統の意義が著しく軽視される一方で、他方でギリシア的諸要素の意義が、正に過大に強調されると共に強く前面に押し出されていた。多分、極端なことを言えば、ベルヴェは、*Imperium Romanum*を、ローマ的価値の全面的承認にもかかわらず、第一義的にヘレニズム国家として理解していたのである。

VI

我われは短い要約の引用をし、その際に、取り分け初めに述べられた判断基準を顧慮したが、結果的に疑いなく明白になったのは、検討した全てのドイツの古代史家たちは、国民社会主義のイデオロギー及び慣用句の諸要素に、むろん様ざまに異なった仕方で喜んで飛びついていたと云うことである。それは、当然、気質とか人間的流儀の問題でもあったが、彼らが、いかに広範に＜第三帝国の言語 *lingua tertii imperii*＞を用いていたことか。コルネマンは、党员では全くなかったが、＜人種混淆と人種の悪質化＞という概念を全くあからさまに利用していた。一方、党员であったベルヴェは、恐らく彼の講演のイタリア人聴衆を慮って、＜生物学的優越性＞について、最も多く語った。要するに、その観念は、かつてテニー・フランクが、かなり前の、方法論的に修正していたが、それでも重要な『ローマ帝国における人種混淆に関して』³²と云う彼の論考で展開していたもので、国民社会主義的徵候の下で三人の研究者たちは皆、分ち持っていたのであった。

しかし、三人ひっくるめて見れば、伝統的で保守的観点と価値評価が勝っていた。コルネマンの場合には、ローマ＝イタリア農民層の活力、それに彼が云う、〈民族的なまとまり〉そして軍事的観点が優位に立ち、フォークトの場合は、力と精神の一致せるものとして、ローマ政治の宗教的基盤であり、ベルヴェにおいては、それに対し、第一にギリシア的視点で、ローマ国家イデーの重要な倫理的、道徳的基盤としてのギリシア哲学の倫理学であった。この三人の研究者たちに特徴的なことであるが、それは、古代的制度にとっての『民族 Volks』という言葉の重要な地位であり、また、国家に、何よりも倫理的、道徳的に正当化され、優れた秩序形成力を見ていたあの古いドイツの国家観念の優勢である。

こうした価値づけの結果、*Imperium*形成の段階にとって、常に共和制期に積極的な主張調点を置くということが更に生じた。〈農夫たちのローマ〉、レース プーブリカであれ、－その理想化、宗教的見地の美化、或いは生物学的な様ざまの要因とか支配本能の強調－共和制国家の拡大は、ローマ政治のダイナミックな段階として何よりも賛美される一方で、帝政期の*Imperium*を評価する際には、正に繰り返し否定的展開と強調された。地理学的諸要因が、一般的にまた最も注目を集め一方で、統治制度上の問題、並びに政治的問題の領域は目立たなくなり、特にフォークトやベルヴェの場合、精神史の問題が、明白に優勢であった。

専門学問的な見地では、フォークトやベルヴェの講演は、*Imperium Romanum*を精神史的に対象化することを正にはつきり示しているが、そうしたことことが可能であったのは、帝国が、ひっくるめて一体のものとして理解されていたが故にであった。より強く相違点を見る考察方法が、もし、こうした一般化を認めなかつたならば、そこには、あらゆる個々の属州が存在し、それらに対し、〈力と精神の一致〉とかギリシア哲学の倫理学の影響とか、何れも語るに値する役割を果たすことはなかつたであろう。同時に、*Imperium Romanum*の政治的一体性について、適切に顧慮すべきことを同様に余り考えずに、今日の我われの理解に従って*Imperium Romanum*を歴史的に構成することは、具体的な場所とか地域的な展開を考慮しないのと同様であるというアポリアを改めて我われは示されるのである。

同時代史的観点からナチス期のドイツの三人の古代史家の位置を、結論的に整理しようとするならば、彼らを実際の権力者たちの犯罪的な様ざまな構想から隔てている深い裂け目が明らかになる。ヒトラーの大ドイツ帝国で絶滅戦略並びに民族全体の移住やらテロによる暴力が考えられる限りの広い範囲で準備されている間にも、これらの学者たちは、理想的な帝国思想を擁護し、統治している者たちの責任と利害関係にある支配下の者たちの尊重を、つまり実際の国民社会主義の指導部がずっと前に『感傷的人道主義』として放擲していたその価値と規範を信じていたの

である。この概念の下で倫理的道徳的或いは宗教的に正当化される秩序権力が理解されていたとすれば、帝国という名に最も値しないあの体制を、にもかかわらず、これらの古代史家たちは安定化させていたのであるという認識は、我われを動搖させるものである。

註

* この論考は、最初、*L’Impero Romano fra Storia Generale e Storia Locale*, Como 1991(Biblioteca di Athenaeum,16),17-42に掲載された。

1 ここでは、1940年、マールブルクでのFr. Taegerの講演『Das Römische und Britische Weltreich』(Marburger Universitätsreden, 2) は考慮していない。彼は、この講演を1940年11月30日、12月1日、<マールブルク＝フィリップス大学の同僚や学生、教職員の前で>行った(a.a.O.,27)。－この講演は、既にK. Christ, *Römische Geschichte und deutsche Geschichtswissenschaft*, München 1982, 230以下で詳細に論じられている。

2 O. Brunner-W. Conze-R. Koselleck(Hrsg.), *Geschichtliche Grundbegriffe*, V, Stuttgart 1984, 423.この中のP. Moraw, W. Conze, E. Fehrenbachによって記された項目(a.a.O.,423-508). それは、残念なことに、古代に関しては全く不十分であるが、中世及び近世に関しては十分な文献を明にしている。ここでも、またこの書物から出発する。

3 Ibid., 489

4 J. Penzler(Hrsg.), *Die Reden Kaiser Wilhelms II. in den Jahren 1896-1900*, II, Leipzig 1904,235.

5 E. Fehrenbach, P. MorawそれにW. Conzeによる個々の例証。O. Brunner他, a.a.o., Reich 項, 506f.

6 A. Hitler, *Reden*, III, München 1943, 117(Der grossdeutsche Freiheitskampf, III). ヒトラーのローマ及びローマ帝国に関するその他の発言に関しては、K. Christ, *Römische Geschichte und deutsche Geschichtswissenschaft*, München 1982, 198f.

7 E. Kornemann, *Das Imperium Romanum. Sein Aufstieg und Niedergang. Ein Beitrag zur ersten europäischen Grossraum-Gestaltung*, Breslau 1941(Vorträge der Friedrich-Wilhelms-Universität zu Breslau im Kriegswinter 1940/41). コルネマンの学問上の仕事については、K. Christ. a.a.o., 133ffを見よ。

8 I. Stahlmann, *Imperator Caesar Augustus*, Darmstadt 1988, 133ffを見よ。

- 9 M. Weber, Die sozialen Gründe des Untergangs der antiken Kultur(1896), in; ders., Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte, Tübingen 1924, 289-311.
- 10 E. Kornemann, Niebur und der Aufbau der altrömischen Geschichte, *Historische Zeitschrift* 145, 1932, 277-300.と比べて見よ。
- 11 E. Burck(Hrsg.), R. Heinze, Vom Geist des Römertums, Darmstadt 1960³ 1972.を見よ。
- 12 M. Gelzer, Gemeindestaat und Reichsstaat in der römischen Geschichte, Frankfurt/Main 1924(Frankfurter Universitätsreden, 19)=ders., Vom römischen Staat, I, Leipzig 1943, 6-28=ders., Kleine Schriften, I, Wiesbaden 1962, 232-247.が、ここでは基本である。
- 13 総括的には、J. Vogt, Römische Geschichte, I, Die römische Republik, Freiburg 1932.
- 14 E. Kornemann, 註7参照。S.17.〈カエサルの暗殺は、ローマ人国家が内部からぶつかった最悪の打撃であった。殺人者たちは、カエサルが計画していた真の大領域の形成をこれっきり不可能にしてしまった〉。
- 15 J. Vogtの生涯と仕事に関しては、詳しくは、K. Christ, Neue Profile der Alten Geschichte, Darmstadt 1990, 63ff参照。H. Bellen, *Akademie der Wissenschaften und der Literatur Mainz*, Jahrbuch 1986, 87-92.
- 16 J. Vogt, Die alexandrinische Münzen, 2 Bde., Stuttgart 1924; ders., Die griechisch-ägyptische Sammlung Ernst von Sieglin, Terrakotten, (Expedition Ernst von Sieglin II, 2) Leipzig 1924.
- 17 Ders., Tacitus als Politiker, Stuttgart 1924; ders., Tacitus und die Unparteilichkeit des Historikers, Würzburger Studien zur Altertumswissenschaft 9, 1936, 1-20.
- 18 Ders., Orbis, Freiburg 1960, 155.
- 19 Ders., Orbis Romanus. Zur Terminologie des römischen Imperialismus Tübingen 1929 (Philosophie und Geschichte, 22) 新版、ders., Vom Reichsgedanke der Römer, Leipzig 1942, 170-207. 再版、ders., Orbis, Freiburg 1960, 157-191.
- 20 Ders., Bevölkerungsrückgang im römischen Reich, Vergangenheit und Gegenwart 25, 1935, 653-664; ders., Rassenmischung im römischen Reich, Vergangenheit und Gegenwart 26, 1-11; ders., Unser Stellung zur Antike, Breslau 1937(110. *Jahresbericht der Schlesischen Gesellschaft für vaterländische Cultur, Geisteswissenschaftliche*

- Reiche, 3); ders., (Hrsg.), Rom und Karthago, Leipzig 1943.
- 21 Ders., Divide et impera-die angebliche Maxime des römischen Imperialismus, in; Das Reich. Idee und Gestalt. Festschrift für J. Haller zu 75. Geburstag, Stuttgart 1940, 21-44; ders., Raumauflistung und Raumordnung in der römischen Politik, in; H. Berve(Hrsg.), Das Neue Bild der Antike, II, Leipzig 1942, 100-132.
- 22 J. Vogt, Vom Reichsgedanken der Römer, Leipzig 1942, 118-169に収録。ここでは、これから引用している。
- 23 Ibid., 5-34.
- 24 Ibid., 119.
- 25 人物と仕事に関しては、以下を見よ。H. Bellen, *Akademie der Wissenschaften und der Literatur Mainz.*, Jahrbuch 1979, 80-82; H. Bengtson, *Jahrbuch der Bayerischen Akademie der Wissenschaften* 1979, 251-256; Fr. Hampl, *Gnomon* 51 1979, 413-415; A. Heus, *Historische Zeitschrift* 230, 1980, 779-787; K. Christ, *Neue Profile der Alten Geschichte*, Darmstadt 1990, 125ff.
- 26 H. Berve, Sulla, in; Gestaltende Kräfte der Antike, München 1966², 382.
- 27 Ibid., 384.
- 28 A. Schulten, Sertorius, Leipzig 1926 .
- 29 H. Berve, Sertorius, *Hermes* 64, 1929, 199-227.
- 30 Ders., Kaiser Augustus, Leipzig 1934. -再版は、ders., Gestaltende Kräfte der Antike, München 1966², 396-447. ここでは、それから引用。
- 31 Leipzig 1943(Schriftenreihe der Deutsch-Italienischen Gesellschaft Leipzig, 1). ここでは、それから引用。短くされ修正された再版は、Gestaltende Kräfte der Antike, München 1966², 448-466.
- 32 T. Frank, Race Mixture in the Roman Empire, *American Historical Review* 21, 1915-16, 689-708. ドイツ語訳、K. Christ(Hrsg.), Der Untergang des Römischen Reiches, Darmstadt 1986², 138-165.

② ユルゲン v. ウンゲルン - シュテルンベルク、「Imperium Romanum 対 ヨーロッパー 1939年から1942年におけるドイツ古代史家たちの若干の講演に関する考察」
(Jürgen v. Ungern-Sternberg ; Imperium Romanum vs. Europa. Gedanken zu

einigen Vorträgen deutschen Althistoriker in den Jahren 1939 bis 1942. 出典；Beat Näf(Hrsg.), *Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus. Kolloquium Universität Zürich 14-17. Oktober 1998. Mandelbachtal-Cambridge 2001. 395-418)*

雄々しき古の昔より借りし羽音も高き鷲の飛翔、
祖父たちの内に自身を誇り、
だが、全てが、全てが偽りだった。

ヴェルナー ベルゲングリュン

I

第一次世界大戦中の学者たちの態度に関する諸著作の傍らに¹、カレン・シェンヴァルダー(Karen Schönwalder) の労作、『歴史家と政治。ナチス期の歴史学 *Historiker und Politik. Geschichtswissenschaft im Nationalsozialismus*』〔1992〕が著され、比較検討が可能となつた。ドイツの大学教員の行動、特に第一次と第二次世界大戦時の歴史家たちの行動をなにが結び付けるのか、そして両者の間の相違は、どこに存在しているのか。²

先ず、注意を惹くのは、公的なマニフェストが見られないことである、即ち1914年10月4日の93人の文化人と学識者たちの《文化世界に向けて》と凡そ400人の大学教官が署名した同年10月16日の《ドイツ帝国大学教官声明》という夫々のアピールによるマニフェストが、いかにセンセーションを巻き起こしたか³。しかし又、微妙な政権に対する1915年6月20日の《知識人の請願》のような請願書や、或いはテオドール・ヴォルフやハンス・デルブリュックの反対請願に相応しいものであった請願書も全く見られない。

外国におけるマニフェストの重要な働きの想起が、その場合ある役割を果たしていたのかも知れないが⁴、しかし又、政権も、集団としてこの種の態度表明を望んでいなかつたのかも知れない、そうでなければ、政権は自らやらせていたかも知れない。残念ながら偶にしか表現されないが、一般的に、マニフェストによる精神的雰囲気の根本的变化が指摘されている。即ち、第一次世界大戦中のマニフェスト、演説それに講演等は、ドイツ人気質やドイツ文化の偏りのない世界とその敵対する世界を明らかにし、説明しなくてはならなかつた。それらは、《1914年の理念》の定義から《1789年の理念》の定義に至るまで、(ミリタリズムと野蛮性という) 敵対的非常に応答しているが、それでもやはり、《論争的対話》の一部であった。第二次世界大戦の当初⁵

には、ヨーロッパの精神世界には、何ら分裂はなかった。人々は、自分が誰であり、他人が誰であるのか知っていると信じていた。人々は、それ故に、又お互いに期待するものは何もなかったし、失望することもなかった。しかし又、心の最も深いところのことは何も語らなかった。⁶確に1914年には《文化世界に》へのアピールは、人々により、まさに吟味されたが、この時には、ナイーヴであるとしてなされなかった。

この場合に、能動性が全く欠けていたわけではなく、第一次世界大戦時よりも、むしろより目的指向的であった。それが、外に現われた当時は、また、非常に膨大な数の公職にあるものたちが関係した。⁷それでも、個々の声明は、一時代精神と完全に合致している場合には人々に刻み付けられた。今や、数多くの歴史家たちが、ナチス体制の職務に雇われていた。⁸彼らは、既にボーランドとの戦争の拡大に伴って、⁹様々な宣伝的文書や、所見、覚書を起草し、更に様々な企画や展示に協力し、講演や講習を行った。

II

1940年、《精神科学の戦時動員》というようなことが、公に宣言され始めた時、それを組織したのは、帝国教育省の代理人としてのキール大学学長かつ法学者のパウル・リッターブッシュ(Paul Ritterbusch)であった。教育省の立場からすれば、その協力している学者たちに、戦時においても又〈固有の活動の必要性と存在意義・・に迫られて〉いることを証明するためには、〈アムト・ローゼンベルクや《父祖の遺産》のような〉学問的な主張が具体化された組織と共に、取り分け重要なのは、恐らくその戦いにおける戦術であった。¹⁰その際、歴史家たちには、《ライヒとヨーロッパ》について語るという課題が課せられ、1941年2月7日、8日、ニュルンベルクでの集会という形で先ず行われた。諸々の講演は、同年公刊されたが、テオドール・マイヤーとヴァルター・プラツツホーフは、その序文で次のように明言していた。

ドイツの歴史家たちは、今次の戦争の中心的問題と目前に迫っているヨーロッパ新秩序のために、歴史的な知識を教授し、現代的視点から、過去の発展を考察し、説明すべき自らの責務を自覚している。

更に、パウル・リッターブッシュは、序文で次のように解説していた。

今次の戦争は、歴史的な画期を画するものである。・・・わが民族にとって、今日新たな歴史的・政治的統一体たるライヒが成立しているが、それは、決定的に全ドイツ民族の初めての全体的な歴史形成である。しかし又、ヨーロッパにとっても、この戦争は、これまで継続してきた体制及び新たに生成されつつある秩序に対し決断を下すことなのである。¹²

彼のぎごちなさにもかかわらず、一或いはそれ故に、これらの文は、正に読む価値があるのである。人々が何よりも考えているであろう《ライヒ》ではなく、《ライヒ》の内に包括的に現実化されている《民族性 Volkstum》が、《ヨーロッパ》に相対するものとなっていた。《しかし又》によって、克服されるというよりは、むしろ強調されている緊張が、そこには感じられる。続いてリッターブッシュは、互いの対立概念、即ち、《シュタート》の概念に明らかに遭遇した。

ライヒとその現実化は、だが、単に我われにとってのみならず、ヨーロッパにとっても世俗的な転換点を意味している。我が民族の分裂したシュタートを克服するものとして、ドイツ民族の歴史的・政治的総体が、中世末以来ヨーロッパを決定し、かつ我が大地を多元的シュタート・システムとして定めてきたその原則を同時に打ち破った。ドイツ民族の深奥から噴き出したその無条件的共同体の観念が、自ら、ヨーロッパ諸国民の共同体に向かって進り出たのだ。¹³

しかしながら、彼の主張するドイツ民族総体と他の諸国民の間の関係は、いかに形成すべきであるのか。ここでは、《ライヒ》とは、《シュタートを超えた共通の歴史的な体制であると云う観念》¹⁴ が中世にまで下げられている。リッターブッシュが、その間に、いくらか軽率に、《キリスト教的な神の国 Gottesstaatの理念》をこの概念の基礎として呼び起こしたとき既に、1941年の問題は、決して容易に解決出来るものではない、ということが明らかになっていた。

我われは、差し当たり、これで十分とし、ドイツの歴史家たちの《戦時動員》とは、彼らの《歴史的知識》を以って、《民族性》、《ライヒ》それに《ヨーロッパ》という御し難い概念を、時間をかけ繋ぎ目が分からなくなり、旧大陸に獲得すべく努められている《新体制》に相応しいものとされるまで磨くことを目標としていたことをきちんと記憶に留めておこう。ゲルマン人の膨張とハインリッヒVI世の早や過ぎる死迄の中世期の帝権が、その書の最初の二本の論文で順番に扱われている。¹⁵¹⁶

III

古代史家たちは、加わらなかつた。彼らは、1941年と1942年、彼らの《戦時動員》を、ヘルムート・ベルヴェとヨーゼフ・フォークトによって指導された二つの古代学集会の舞台で遂行した。¹⁷ 彼らの緒言は、そのことの何が本来《戦争遂行上重要》であるべきなのか、彼らに正確には認識されていない正に時の話題である人種問題の強調を示しているが、それはもちろん書物自体同じことであった。取り分け、ベルヴェは、〈歴史のいかなる時代も、彼らの重い生の諸問題に対して答える〉ことが出来ないように、古代も答えることは出来ないと云う確信と〈安易に時流に応じること¹⁸〉の警告を結び付ける。次いで、彼はこの企画の意味を説明しようとする際に、なるほどヨーロッパの現今的新秩序に触れるが、しかし古代学の貢献としてその実際の能力をはるかに超えることを挙げようとはしない。

ヨーロッパ大陸の新たなる形成をめぐる激しい軍事的戦いの時代に、ドイツ古代学の立場と実力を明らかにすることは、望ましく、正に必要なことのように思える。そして、必ずその学は、ヨーロッパ的意義から、戦争終結後のヨーロッパの精神生活における結束のための要素として本質的役割を果すべくその対象に任用されるであろう。²⁰

フォークトは、より慎ましく行った。編著『ローマとカルタゴ』の彼の緒言は、《古代学の戦時動員》の範疇にこの作品は入るであろうと、確かにその考えを明らかにしていたが、ドイツ的なるもの(Deutschtum)とかヨーロッパに関しては、何も語っていない。そもそも何も語らないということ自体、この行為は、1942年、1943年という時代には何ものかを意味していたであろう。しかし、ローマ人とカルタゴとの間の人種的対比の重要性に関する主題は、この時代の文脈の中では十分重いものである。

この書物を少し眺めるだけで、この印象は認められる。国家的な問題の措定に関しては、ただ僅かな寄与しかせず、このこと自体、時代の話題に応じることを避けているのである。その限りでは、この禁欲は、超時代的な学問そのものが生きていた同じ年の専門雑誌—Hermes、Klio、Philologus—に対応しているが、しかしまだ、更に多くの読者を獲得しようとしていた雑誌では、その姿は大変異なっている。Die Antike、Das Gymnasium、Die Nue(n) Jahrbücher für Antike und deutsche Bildung等は、確かに戦争や軍人の勇気に関する論考にかなり用いられているが、古代における国家形成やら関連した問題に対しては、そこでは非常に僅かである。²³²⁴

指導的な古代史家たち—フリッツ・テーガー、エルンスト・コルネマン、ヨーゼフ・フォーコト、マティアス・ゲルツァー、それにヘルムート・ベルヴェーが、Imperium Romanumに關して、より広範囲な聴衆に対し見解を明らかにしている一連の講演は、それだけいっそう考察するに値する。²⁵
²⁶

これらの中では、テーガーの講演は、独自である。中世史の彼の同僚、テオドール・マイヤーが、1940年1月30日、既にその前置きで話題の言葉、換言すれば、『ライヒ』—『ヨーロッパの新秩序』—『全ドイツ民族の国家 Reich des ganzen deutschen Volks』を提示していたのであるが、これらの言葉は、戦争の開始に際しての英國との論争でのテーガーの講演に全く相応しいものである。²⁷ 言い回しに至るまで、これらは、第一次世界大戦の思想、取り分け古代史家エドゥアルト・マイヤーに負っているのであり、1915年のマイヤーの英國に関する書物を、テーガーは、それ故繰り返し引き合いに出していた。²⁸ 第一次世界大戦以前に既に、テーガーによって序文が書かれ、編纂されたアメリカ人ホーマー・リーの著作、『サクソン人の時代』が公刊されていたのであるが、²⁹ その書物は、アングロサクソンの世界支配的立場とドイツ、日本、それにロシアという興隆せる諸国民に対する必然的な来るべき戦いを印象深く記していた。³⁰

テーガーは、時流の言い方に—全く効果はなかったが—全面的に合わせていても、その時代のスローガンを何一つ共有していない。彼が、<到達すべきドイツの戦いの目標>を理解しているとしても、<イギリスが屈服したら、ドイツと他の諸国民のヨーロッパおよび世界における生存権を認めさせること>(26)で、これは、同時にまた1914年のマイヤーの考えである。ドイツの指導的立場は、視界はない。両世界帝国の対比は、皮相的なままで(19ff)、イギリスは、<ローマ世界帝国のように、地政学的な必然性の法則によって、誕生したのでも、持ち堪えてきたのでもない>し、<イギリスは、ローマのように、同種の血統のより安定した基盤に>(24)建てられてはいない、と弱々しい慰めを狙っているに過ぎなかった。テーガーは、彼が第一次世界大戦の前線の兵士として経験していたイギリス人の献身的犠牲に劣らず、イギリス世界帝国の強さをよく知っているが故に、その慰めは、確かに弱々しいものである。³¹
³²
³³
³⁴

他の諸講演は、フランスに対する勝利の後、スターリングラードの大惨劇の前にそろって持たれたのである、つまりナチス的意味でのヨーロッパの形成が、実際に手の届く近さに見えていた時代になされた。ゲルツァーの講演は、確かに最初の段階では、次々と同じように、『指導秩序』、『統総國家』、『指導』それに『指導要求』等の概念を持ち出しているが、しかし、更にその先

では、現実に和することを避け、<19世紀この方、近代の諸国家に対し非常に多くのことを生み出させてき少数民族問題は、それまで存在していなかった>であろうと強調している。³⁵だが、直ぐにその後、ある節で人種思想に対し彼の敬意を表している。³⁶結論で、初めて同時代の方を向いている。

・・・だから今日、正に指導秩序の問題が、・・・我われの特別の関心を呼び覚ましているのかも知れない、何故ならば、総統国家によって生み出され、導かれる秩序の中に空間的に互いに緊密な諸国民がグループ化されることによって、諸々の民族国家の共存に取って代わる、そのような来るべき世界史の展開の兆候が、既に感じ取られるからである。³⁷

—恐らく、確かに1942年の—読者に対して、彼自身の考えは結論に委ねるべく、彼が歴史的教訓として挙げているのは、<あらゆる人間的秩序は、権力維持のために必要であるという単純な事実>に限られている。

このことは、むろん余りにも明白なので、歴史家は、そのことを敢えて表明しよう等とは殆どしないし、またローマ人は、そのことをサラステイウスから知ったのであった。即ち、「・・・というのは、権力は、最初にその権力を得るために用いたその方法によって容易に維持される」。さらに、「権力は、常に良くないものから最良のものに移行せられる・・」。しかし、この単純な文章から適切な教訓を引き出すことは、こうした国家形成をなす支配者たちにとっては、たいそう難しい技術を意味していることを、ローマの歴史は教えており、それ故、指導秩序を評価する場合、そのことを人は思い起こしても良いだろう。

コルネマンは、より精力的に時代の方に顔を向け、その場合、彼は、『Das Imperium Romanum』と云う彼の講演を、副題では《ヨーロッパ最初の大広域形成への寄与》としている。その時代の特別の言葉で、彼は<民族主義的な>、<摂理>(6)、<今日の英國に見られるような、ローマの民会の大衆エゴイズム>(9)、<国家と軍の統括>(11)とか、<あの近代ヨーロッパの見事な均衡の先駆者として、確かな均衡の維持をめぐる>(14)ヘレニズム諸大国間の闘いとか、<我われが、前に述べている小規模な協約を駆使した>(14ff)ローマの政治、<脱農民化 Entbauerung>、<脱民族化 Entvolkung>、<人種混淆と人種の質的低下>(28)等々について語っている。

コルネマンは、地理的－地政学的考察から始める。〈ドイツと同様、・・イタリアも、中国家である・・。両国は、弱小国の時代には、繰り返しあらゆる方面から侵略され、興隆の時期には、もし両国が、二方面戦争に押し込められたくないなら、余儀なく軍事的攻撃や進出で、両国の安寧・・を求めるべきだ〉(7)。ローマの拡大現象についての彼の記述は、しかし、全く優柔不断である。先ず、彼は、〈新たなイタリアの同盟諸国領域の拡大〉は〈防御から〉結果的に生じたのであったと断言しながら(8)、第一ポエニ戦争を〈ローマの最初の征服戦争〉、さらに〈略奪戦争〉と性格規定し、ポエニ平野への侵略の際の、〈絶滅戦争の身の毛もよだつやり方について〉³⁹(10)語り、そして最後に更に、〈古代国家の、・・最も貴重な存在であるその国の農民層を・・犠牲にした世界支配の幻想〉について語っているのである(15)。一方で、(〈このローマ最大の人物である〉)カエサルの殺害は、〈真の世界帝国の誕生を挫折〉させてしまったと、彼は残念がっているのだが、この殺害が、〈カエサルが計画していた、真に広域空間形成を、完全に不可能たらしめた〉からであった(17)。アウグストゥスは、彼にとって、〈最も才能豊かな指揮官・・に続く、今や、古代世界最大の政治家〉(18)である。国内政治の顧慮から強いられた(23)そこで彼の和平政策を、取り返しのつかない結果を招くようなものと評価している。即ち、〈停滞は、・・・国家生活における後退を意味している〉(21)。〈政治において、またそれと緊密に結びついた戦争指揮においては、やり過ごしてしまった機会・・・は、ほとんど二度と埋め合わせることは出来ない〉(22)。

最後に、コルネマンは、興隆と没落の原因に関して問いかける(27ff)。彼は、もっぱらそれを道徳的－生物学的範疇に見出している。即ち、〈家族〉、〈縁結び〉、〈ローマの人的長所〉、〈國家の責務の定言的命令〉、〈子沢山の農民たちの土地への渴望〉、それに〈支配層の構成員における名誉欲や権力欲〉にである。〈古来の農民精神やこの国民の農民意識が、戦争に伴う過剰な負担の結果として、消滅し始めたとき、没落が・・相應しく、入り込んできた〉。－〈プロレタリア階級〉、〈奴隸階級〉、〈人種混血と人種の質的悪化〉、〈公租の扱い手の大衆〉、〈階層社会〉が、その論理的結果であった。コルネマンは、ローマ国家の組織や或いは構造を分析することは全くない。そこで風変わりな主張がなされる。即ち、〈しかし、ローマ国家の権力構造及びローマ経済は、変化しないままであった・・・。古びた家が、なおそこにあった。しかし、家には、今や別の人間が住んでいた〉。時代に対する適用を、講演は断念している。⁴⁰

ベルヴェもまた、彼の講演ですぐに本題に入る。

世界のかなりの地域の再編が、今日、軍事的、政治的領域で枢軸国に課している巨大な様ざまな課題の中で、地中海領域の新たな形成が、突出した位置を占めている。⁴¹

彼に耳を傾けている集団であるドイツ＝イタリア協会に相応しく、しかし、彼は最近成立したばかりのイタリアの協会のためにImperium Romanumの手本的機能について語るに過ぎない。前提条件の指摘が続き、〈地理的に・・中央であり、地中海支配に対するイタリアの正に運命的な位置・・生物学的に根源的に健康な国民性〉。最後の方でかなり長い記述がなされる。その話は〈その土地固有の豊かな生産性と力、及び真に農民的な気質に関して〉であり、〈堅実な勤労精神と、したたかな現実感覚〉が〈その地に住む者たち〉の特色であって、〈彼らは、生まれつき不器用で、周囲に対して勇ましく向こう見ずであるよりは、むしろ辛抱し、打算的に振る舞う〉(4)。お決まりの言い方は、隠された意味なしには使われない。一体、〈堅実ではない勤労精神〉は、誰に当てはまるのか、或いは一もつ後での定式化によればローマの政治家たちの〈農民のように抜け目がない考え方〉(10)と、例えば〈カルタゴ人の信義 Punica fides〉を何が区別しているのか疑問に思う。しかし、次いで、東部地域における〈その土地固有の様ざまな勢力の〉衰微に関する箇所で、〈強大な、恐るべき勢力〉が力を伸ばし(20)、或いは〈粗削りで、古代にはない様ざまの要素を抱えたその田野部〉が正に前面に表われ、〈洗練された市民たちが、無骨な村の住民たちに〉屈服しなければならないならば(22)、偉大なるローマにとっての〈健全な〉ローマの農民層という説明の説得力は、かなり不確かなものになる。

ベルヴェは、戦後上手く時流に合わせ、若干修正している。〈それぞれ指導者の地位を確保するには、總統国家の生物学的優越性を必要としているという無意識的認識〉から、〈それぞれ指導者の地位を確保するには、その基盤のある種の広がりを必要としているという直観的な認識〉になっており、その際に〈無意識的な〉を〈直観的な〉⁴²に換えているが、それは1942年という年の傾向に、むしろ後から合わせていることを意味している。〈人種的血族の〉から〈同種族の〉⁴³に、〈セム族の〉から〈東部の種族出の〉カラカラ皇帝に換えられている。一方で、〈西洋的團結心の概念〉や、或いは東部地域で〈強まるオリエント的な流れに対するヘレニズム的要素と意識され受け取られていた西洋的責任感〉は、時宜に適っていたし、〈ゲルマン的誠実〉は、なおかなりの間有効性を保っていた。⁴⁵

ローマ史を考察する際には、ベルヴェは、徹底的に伝統的見方に留まっている。地中海世界の征服は批判的に叙述され、アウグストゥス以降、国家の体制は明るく輝き始めるが、その成功自体が、しかし衰退の原因になってしまう、と。

我われは、ローマが、共和政時代の素朴で、厳しいが、しかし民族主義的な強力な支配に代わって、責任を自覚し、民族を庇護する国家統治を行なってから、自ら弱体化したという真に悲劇的光景を経験するのである。(21)

ここで考察されている他の全ての歴史家と同様に、ペルヴェの場合でも、このことは、A.D. 212年の*Constitutio Antoniniana*によって象徴される。そして、彼は、再度ローマのアポリアを述べる。

実際、ローマの支配領域の現実の秩序もまた、狭い共同体国家的な仕方を克服することによって初めて可能になったのであるが、活発で混じりけのないイタリア人なるもの (Italikertum) の民族的な実質なしには、¹⁶ Imperium Romanumを内に対しても外に対しても維持してゆくことは不可能であった。

取り分け、やはり、ここでもペルヴェ独自の、彼の前提によって与えられているアポリアが問題であった。¹⁷ というのは、1942年の同時代人たちは、このような説明から、どのような教えを引き出したであろうか。ローマ化の過程や平和的秩序の称賛同様に、<服属者の安寧に努める専制君主>、<繁栄に満ちた統治>、<責任感に溢れた官僚たち>、<かなり健全な国家行政>、<規律正しい軍隊>等々のペルヴェにとり確かに重要な全ての称賛は(15ff)、<民族的基盤>を放棄してしまったことの悲劇的結果に対する警告に比べて、殆んど意味がなかったであろう。

ただ、ある注目すべき文章で、その当時の一般的見方に対してペルヴェの批判がなされている。ローマの防御的な帝国主義についてのモムゼンのテーゼに対し、彼は、軍事的に勝っている敵に対する懸念と不安という動機から元老院は、行動していたことを認めたのだが、次のように続ける。

—活動している人間は、実際気がつかないが—、来るべき支配のために、瞬時に必要だと判断される安全確保の措置から生じるあらゆる可能性を、間違いない判断力で捉える生得的な統治本能が関わっていたということを疑うべきではないだろう。このことを否認したがるものは誰でも、かの時代のローマ的思考とその時代の公式的説明に捉えられたままになっているのであり、こうしたことを批判する権限が歴史家にはある。つまり、ローマは、純粹に防

衛的意図から、言ってみればその意思に反して、地中海における支配的位置を手に入れたかのような見せかけの表現を、彼は、本当だと見做す他はなかったのかも知れない。実際は、そんなことは絶対に有り得なかった(9)。

もちろん、彼は、同じく続いて、再度強調する。〈事実、当時のローマ元老院の図面通りの国家を建設するという帝国的思考は、追い求められなかつた。特別の政治的才能の秘められた働きは、誰にも気づかれない〉(10)。

またベルヴェの説明では、つまり Imperium Romanum の歴史からは、現代は、殆んど学ぶことは出来なかつた。次のように言うことが出来るかも知れない、一ほぼ何もなし、と。一だが、実際の前文は、《当時》と1942年という《今日》との間の類比を勧めるに過ぎない。その鍵となる個所では、予め、即ち、〈便利ではあるが、非常に紛らわしい類比〉と注意を喚起し、そして〈いつでも大きなスケールで政治が行われているところでは、実際にあつたし、また実際にあるであろう根本的な諸力〉(23)について曖昧に語るに過ぎない。悲劇的没落の後に、このような考えはずっかり、無意味だとして捨て去られ得たが、そこにはテクストはそうではなかつた。それは、ローマ帝国のいわば時代を超えた考察のために、一覆いを取られると共に筋の通つたものになっている。〈というのは、ローマ帝国の発展、興隆と衰退の内的な法則性と同様、この形成されたものの歴史的偉大さは、全体を概観して初めて、明らかになるからである〉⁴⁸。

V

我われは、中間的結論を出そう。ゲルツァー、コルネマン、それにベルヴェの講演は、その同時代的な用語《ライヒ》、《フォルク》そして《大広域 Gross-Raum》に習熟していたことを示している。時代へのこうした言葉の適応とか、ましてやそれらの解明の手掛かりには、これらの講演は、全く寄与しない。講演時間の短さのために、必然的にローマ史全体の流れの月並みで表面的な概略を問題にして、それは、多かれ少なかれ、ナチス政権独特の言い回しでなされている。他方、確かに講演という純然たる事実は、その当時ドイツの歴史家たちに《戦時動員》への参加要請を喚起したのであった。

〈根本的誤り πρώτον ψεύδος〉は、Imperium Romanum、即ち、ローマ《帝国 Reich》の軽率な利用にある。⁴⁹ 帝国 (Kaisertum) と諸王国 (Königreichen) が共存している中世期の諸国家 (Reichen) を観察して、何らかのやり方で大ドイツ帝国とヨーロッパ諸民族/

諸国家（Völkern/Staaten）の共存に注意を喚起されているように感じ得るとしても、それが国民国家（Nationalstaaten）を超えて築かれたからでも、その反対でもないと主張されねばならなかったことに、正にローマ帝国の成功と長期的存続は基づいていたのである。十九世紀、二十世紀のヨーロッパの諸関係との比較は、それ故、必要な変更が加えられる（*mutatis mutandis*⁵⁰）等というのではなく、正にそもそも不可能なのであり、一或いは、精々のところ、対照するという意味においてで、その際には、全く異なる構造とその前提が相互に対照され得るかも知れない。

Imperium Romanumに関し確実に言われ得ることは、しかし、一この点はここでは議論され得るに至らなかったが—中世期の国家（Reich）に関するもまた、大変重要なことである。ローマの帝国思想と中世期の国家を結び付ける際、その思想は後のヨーロッパの諸民族や諸国家より前から存在していたのであり、その背景の中で、徐々に形成され適当に変形されていったのである。こうした《国民国家以前の pränationale》秩序は、全く単純に公式化すれば、《国民国家以後の postnationale》⁵¹ 或いはまた、《民族的 völkisch》な秩序のためのモデルでは、全く有り得なかった。K.シェンヴァルダーが、適切に注意している。

『ライヒ』は、しかし中世期に立ち戻ることをただ単に意図していたのではなかった。40年代の一連の全ての公表されたものでは、ライヒは、自らの国家（Nation）を大きく超え、歴史的な先例から大幅に外れたドイツ人の支配要求に対する漠然とした、非合理的な理想化された概念になっていた。様ざまの相違点にもかかわらず、ライヒは、ナチス・ドイツの政権下で強く捉えられたヨーロッパの内部的諸関係を新たに形成するという考え方にとって、その中心を占めていた。それは、表向き歴史を貫く、かつヨーロッパの諸関係にとっての理想的原理であると援用することで、霸権要求の合法化を意図していた。⁵²

VI

歴史家の《戦時動員》の標語、モットーは、《ライヒとヨーロッパ》というものであった。つまり、それは、二つの概念を緊張関係の内に立たせていたが、古代史家たちは、後者の《ヨーロッパ》には実際的に力を注ぐことはなかったが故に、彼らには、もともと意識されるに至らなかつたことであった。しかし、どちらかと言えば、両概念は、互いに互換的であるとか、或いは全く融合することが出来るというよりも、既にパウル・リッターブッシュが感じていたように、むしろ、互いにライバルに立っている二つの概念の緊張関係は、総じて何故なのであろうか。⁵³

『ライヒとヨーロッパ』は、1940年の夏の状況を差し当たりかなり直接的に反映しているのである。ポーランドに対する勝利、デンマーク、ノルウェーの占領、オランダ、ベルギーそれにフランスの降伏に伴う西部地域への進出、それにイタリアの参戦に伴い、ヨーロッパ、少なくとも、イギリスとソ連の間のヨーロッパ大陸は意のままに置かれ、ヨーロッパの《新秩序》に関し熟慮することが可能であるように見えた。しかし同時に、オーストラリアの《併合》によって1938年初めに生じ、そうこうするうちに確実に再び力強く拡大した《大ドイツ帝国》の、この新しく整えられたヨーロッパに対する関係を、どのように形成するべきかという問題が現実的になった。しかしながら、真の破壊力というものは、以下の点にあった。即ち、確かにドイツ帝国 (Das Deutsche Reich) は、ナチス体制の現今の大なる力に基づいているように見えたが、そこに由来するあらゆる秩序の安定性は、しかし、それが諸国家 (Staaten)、諸国民 (Nationen) 或いは諸民族 (Völker) であれ、これらその他のものの承認に依っていたことであった。絶え間なくより激しさを帯びていったソヴィエト連邦との戦いが、ナチス体制にヨーロッパ／西洋との結束の必要性を迫っていただけに、この問題は、それだけ一層重要であった。

ここに今や、ヨーロッパ概念は、恐ろしく深い問題を有する現実であると共に魅力的な現実でもあることを顕すことが可能となった。この概念は、むろん1940年に生まれたのではなく、この時代までに、およそ2500年を経、⁵⁴古代、中世、それに近代の歴史を刻印され、⁵⁵豊かにされてきた。この点は、よく考えねばならないが、—我われは近代の政治的なヨーロッパ概念を覗くことから始めることが可能であり、それを為さねばならない。⁵⁶

シュリー公から始まり、サン・ピエールを経てサン・シモン伯に至るヨーロッパ構想は、諸国家体制の平和の確保と自己統治に対する秩序づけを常に目指していた。これは、一例えば、ナポレオン一世が、彼のヨーロッパ概念の中で過剰にそれを実現しようとしていたように一覇権主義的な観点を必ずしも排除してはいなかった。しかし、関係諸国家の平等な権利が中心になっていた。第一次世界大戦の衝撃により、クーデンホーフ・カレルギー男爵は、単に汎ヨーロッパ運動を創設しただけではなく、1929年、初めて実際の政治家であるブリアンと共に、「ヨーロッパ諸国連合」を宣伝し、1930年5月17日には、取り分けヨーロッパの経済的統合を目指している覚書が、国際連盟のヨーロッパ加盟国諸国に伝わったように、ヨーロッパ理念は構想という段階を超えていった。ブリアンの突進は、2日前、その計画を演説の中で支持していたシュトレーゼマンの1929年10月3日の死去等々で難破したが、ヨーロッパ理念は、しかし、それと共に、決定的に日常的議論の対象になった。

いくらか、イタリアのムッソリーニが、国際的運動を甦らせたことが明らかであり、1932年11

月、ローマでの最初の会合—その際に、フランスの古代史家、ジェローム・カルコピーノが『ローマ帝国とヨーロッパ』に関して話したのであるが—の後に、ファシスト諸党（ナチス党は除かれていたが！）の集まりを1934年12月モントローで開催した。それに対抗して、ドイツの国法学者、ケラー（H.K.E.L. Keller）が1934年春チューリッヒで「国際民族主義者労働協会：Die Internationale Arbeitsgemeinschaft der Nationalisten」を創設し、ベルリンで最初の会議を開き、次いで1935年7月ロンドンで会合し、そこで常任書記が設置された。⁵⁷この会議で、30カ国の代表者たちによって暫定的な綱領が採択された。

国際民族主義者労働協会は、ヨーロッパ諸国の政治的、経済的な生存権の学問的研究に尽くし、そのことを通じて、全ての個々の国民の中に、自然的、文化的な民族性の多様性に基づきをおいた独自の有機的なナショナリズムの発展を奨励する。そこに、協会が、民族的枠を超えた不朽の秩序を既に描いているのを見るであろう。そして、幸いなる名誉ある平和の確保、諸国民の自由それに社会的公正さを共有するためには、諸国民はその承認を表明しさえすればよいのである。

1936年、再度チューリッヒで開催された労働協会の第10号機関紙は、フリードリッヒ・グリムの『ヒトラーとヨーロッパ』⁵⁸という論文を掲載した。そこでグリムは、正直な民族主義者たちの間にのみ協調が可能であろうというテーゼを擁護し、次のように結論とした。

我われの時代のあらゆる混乱から、新たな人類がたち現れ、それまでは互いに争っていたあらゆる土地の民族主義者は、そこでは国際的な協力のために、それにヨーロッパの救済と再建のために手を差し伸べるであろう。

これらすべては、全く曖昧に定式化され、結局また全く曖昧なまま構想されていたが、とにかく《民族主義者のインターナショナル Internationale der Nationalisten》は、マルクス主義に張り合って、故意のパラドクスを意味していた。よし又《右派》によって認知されたにしろ、ヨーロッパの一般的な理解では、民族主義諸国家の対立で、それは発展し得ないであろうと予測されていた。

第二次一であると共に、確かに再度の一世界大戦の勃発は、この見方を裏書きし、現実化した。リブゲンスとノイレンの大規模な史料集成は、イギリスで、そして最後には僅かに残されていた

中立国で協力者や抵抗者たちによって、ヨーロッパ概念が練り上げられていたのと同様に、その当時、国民社会主義、及びファシスト側に立ったヨーロッパ概念が、練られていたことを証明している。時代は、ヨーロッパの秩序のためには機が熟していた。一たとえナチ党が、その準備をしていなかつたにせよ、特にヒトラー自身、しかし又ヒムラーやゲッベルス等も、ヨーロッパ構想を全く否定していたわけではなかつたかも知れないが、それらは、殆ど口頭によるものであり、既に遅すぎたのである。ヘルツシュタインの言葉から。

1940年頃には、多くの国民が、自由主義と資本主義に幻想を抱き、終わりの見えない戦争が、逆説的に激しい民族主義を惹き起こしていた。彼らは、ナチスが、統一された正にヨーロッパを創造する第一歩として、その勝利を用いるであろうと期待したのであった。我われが、こうした期待を、それ自体が不合理で、不可能であるとして萎ませてしまう前に、忘れてならないことは、1940年から41年迄は、ナチズムは、多くのヨーロッパ人にとって抽象的なものであり、人々に、最悪の予想をすることなく最良のものへの期待を抱かせるものであった、ということである。軍事的占領でさえも、必ずしもこうした期待に終止符を打つことにはならなかつた。実際、ナチスによる成功は、多くのヨーロッパ人たちに無関心、恐怖、それに楽観主義が奇妙に交じり合つた「新しい秩序」を期待させたのであった。多くのヨーロッパ人たちの幻想を取り除くには、ドイツの二枚舌と血なまぐさい占領統治が必要であった。⁶⁰

我われによって考察された古代史家たちは、こうした問題状況から遠く離れていることは明らかである。彼らは、疑う余地なく一時代精神を口頭では認めていたが—テオドール・モムゼンによって指摘されている専門分野に留まっている。ベルヴェが、初めて古代の<ヨーロッパ概念>を論じるとことになったのは、1949年であった。⁶¹ Imperium Romanumが、生成していくヨーロッパに対して何を意味し得るのかという問題を根本的に研究することは、現代にまで取って置かれているのである。⁶²

VII

個別的な《シャート》や《ライヒ》という概念を乗り越えようしたり、他方で《ヨーロッパ》という概念を用いたくないような場合、《フォルク》や《ラウム》という曖昧な着想に逃げ道が用意されてきた。カール・シュミットが、彼独自の精力を振るって、著名な論文『域外国家

に対する干渉禁止令を伴う国際法上の広域圏秩序—国際法上の帝国概念に寄せて—
 Völkerrechtliche Grossraumordnung mit Interventionsverbot für raumfremde Mächte.
 Ein Beitrag zum Reichsbegriff im Völkerrecht⁶³ で、この道を歩み出した。彼は、それによつてヨーロッパ諸国家が、南北アメリカ大陸から離れなければならなくなり、一方、アメリカもヨーロッパの戦争には自分の側から介入しないであろうという1823年12月2日に発表されたモンロー・ドクトリンを心に留めていた。その中心は、広域圏原則に完全に任すことのようだつた。彼は、＜一つの秩序原理によって支配されている広域圏内に、外部の勢力が干渉することを国際法的に認容しないこと＞とそれを定義している。このような秩序、或いは広域圏原則を、シュミットは、ヒトラーにより宣言された、事実上中欧から東欧の広い範囲に対するドイツ単独の管轄権の要求であった＜他の諸国家に属しているドイツ民族集団（deutschen Volksgruppen）に対するドイツの保護権⁶⁴＞に認めていた。

シュミットの考え方は、疑いなくその時代に相応しかつた。第一次世界大戦中に既に宣伝されていた《中欧》という観念を、彼自身回想している。⁶⁵ その一年前に、トリエペルが、ヘゲモニーについて彼の著書を著していた。⁶⁶ ひな形としてのモンロー・ドクトリンの参照は重要であり、又、その当時、国家とその勢力範囲についての考えが、広範囲に広まつていたこともまた見過ごされではならない。⁶⁷ それでも、根本的な異議と疑問が存在していた。輪郭がはつきりしている南北アメリカ大陸の場合とは異なつて、即ちドイツの側では、広域圏をどのように定義すべきなのか必要なのであり、言い換えれば、境界を定めるべきなのであり、そのための手掛かりになる具体的な点が何もなかつた。こうした勢力範囲を実質的に正当化することは、なお一層困難であつた。確かに、見たごとく、モンロー・ドクトリンの場合、ヨーロッパにおいては先ず適切であつた。《ドイツ民族の保護》は、決してモンロー宣言には及ばなかつたし、ドイツの権力行使の実際の中身と少しも一致していなかつた。基本的に、広域圏原則は、外部から干渉を受けずに一言い換えれば、コントロールなしに、ただ絶対的な行動の自由を布告したに過ぎなかつた。⁶⁸

VIII

古代史家たちの中では、ただ一人こうした曖昧で都合のいい考え方の長所を理解していた。ヨーゼフ・フォークトである。彼の《帝国思想》の講演は、＜ドイツ第一帝国⁷⁰＞をImperium Romanumと近代ヨーロッパの間に措定し、同時に広い定義を与えていた。⁷¹

広大な領域に住む多くの諸国民に対し、権力とその職責の問題を絶えず統制し、広範囲な影響力を振った政治権力の存在を、帝国にとって本質的なものと我われは考えている。この体制の構造には、精神的な糾が働いていなければならないし、一つの目標が明確にならなければならぬ。物質的な構造の仕組み以上に、部分は全体からその生の安寧を獲得するに違ひなく、かつ部分は犠牲を払うことの意味を受容するに違ひない。このように帝国は、その広大な世界の力と精神を統一したものであることが明らかである(5f.)。

フォーケト自身は、その点を明らかにしていないが、カール・シュミットとの繋がりは、明白である。その上、彼の定義に、何か《観念的な》気分があるとすれば、その理由は全く単純なことである。というのは、シュミットは、彼の《広域圏原則》を大変形式主義的に定義し、《秩序構想 Ordnungsgedanken》に関して、ただ僅かに曖昧に述べたに過ぎないが、一方、フォーケトは、具体的で歴史的な Imperium Romanum の現象を用いて、《帝国思想》を問題にすることが可能であったからである。と同時に、彼は、あることを、始めからしていた。即ち、たとえ、当然時代的経緯を彼の説明の中に加えなければならなかつたにせよ、彼の古代史の同僚たちに、その講演がなされているかのように、彼はローマ史の退屈な梗概を省略したのである。

先ずなにより、フォーケトには、<卓越した指導者の責任から差し出されたものであるが、秩序を確立せんとする目的に励み>(8)、地中海を取り囲こむ<広大な領域>—彼は、<広域圏 Grossraum>という表現をしているが—を打ち立てることが問題である。彼は、取り分け<イタリアにローマの権力を打ち立てることで>このことが実現されたと認めており、そこでは、誰一人<征服、隸属化の状態に永久に留め置かれること>はないであろうし、それどころか全ての者たちが、ローマ市民法の中に統一されたのであった(9)。<民族性や異質な文化に従つて>海外で獲得された土地でも、こうした経過が、カエサルによる端緒の後、アウグストゥスが、<全将来に亘る支配権力の義務意識を回復>してしまうまで、確かに大変長く継続したのである。

必要不可欠になった人格的国家指導は、元首の内にローマの特質を保っていた。帝国の構造にも、またはっきりとローマが存していた。と言うのは、ローマ市民が、明白に支配的地位を占め、そしてイタリアが、中核的領域を構成し、そこから世界は導かれねばならなかつたからである。アウグストゥス時代の世界支配は、諸々の土地を守り、管理し、かつ維持するという正当な行為であるべき故、長期に亘る内乱による荒廃の後、これらより高き使命のためには、元首は、ローマ国民を、先ず改めて鍛えなければならなかつた。活力を強め、支

記者に相応しい高潔さを再生することが重要であった。今こそ、ローマは、諸国民の支配という神により与えられた使命の求めに応じることが可能になった。属州の服属民たちは、この帝国秩序の中で、明らかに、総じて平等な権利者たちではなかったが、しかし彼らもまた、ローマ市から派遣されてきた者たちにとって搾取対象物では最早なく、誠実に保護されなければならない被護民であった(11)。

続く帝政期の考察は、それが、平和の維持、軍、交通、それに諸都市の要求について触れる場合、この方向に従っていた。最後に、フォークトはローマの軍司令官ケリアーリスに語らせ（タキトゥス、hist. 4,73f）要約している。＜ここには、率直に、冷静な言葉でインペリウムの損得、服属民の犠牲と利益が明確に述べられている＞。そして＜勝者の法は、帝国の構成にとって基本的なものであり、常に支配者と服属者が存在していることが、ここで意外にもはっきりと言われている＞、とその考察はなっている(18)。

＜我われの歴史的世界の＞見地から(18)、フォークトはそれに対して、批判的に異議を持ち出す、＜これら全てのことは、協働が余にも少ないと、自治行政に対する極端に控えめな評価のように、我々には見えるかも知れない＞、＜Imperium Romanum＞は、我々には＜帝国のそれぞれの自立的部分を統合することにおいて機能していなかった＞(19)ように見える。後に、彼はこの点を具体的に述べる。＜人が生まれる都市とローマ人が人類に対し現実化した世界都市との間には、自然的な結びつきも、血縁関係も、国民も何一つ全く明らかでなかった。＞人類の一体性の考えと共に、帝国思想の内に＜非歴史的要素＞が入り込んでしまったかのように。

この思想は、現代の歴史的思考が持っているような緊張を知らない。即ち、この帝国思想は、創造的人間の固有の使命をまさに信じ、偉大な行為の画期的な意義に関して知り、大胆極まる行為の計り知れない影響範囲を予想するというような、能力を欠いていた(22)。

これまで、こうした靄の背後にして隠れていたかも知れないことを、何れにせよ、ここで、ローマ帝国が陥った硬直的有様を、ないしはそれの大いなる敵対勢力としてのキリスト教によって克服され(29ff.)、同時に変形して継承されていく様を、フォークトは明らかにしている。続いて、フォークトは、再度、帝国思想を評価している。

我われは、その欠点をも見逃さなかつたが、しかしまだ、この思想があるとてつもない領域

に秩序を齎し、多くの諸民族を支配する国民を助ける力になっていたことを、それに認めなければならない。この500年間、この思想は諸国家の秩序に関する考えられる限りの最高の解決策を明らかに示した。この功績は、帝国思想の最奥の核心に、言わばその責任の重さを自覚している支配というもののローマ的的理念に、我われをきっと連れ戻すであろう(32)。

IX

考察結果は、考えさせられる。フォークトの講演は、細部が、よく熟慮され関係づけられた一貫した考え方をしている。《健全な農民層》のような時流に乗った定型句や人種思想自体を、彼は、そのためここで全く放棄している。⁷⁵つまり、他の同僚とは異なって一彼は、広域構想についての考察から現代との大規模な類比、即ち1942年当時のヨーロッパにおけるドイツの強力な位置と権力行使を暗に含んだ叙述に成功した。彼の叙述は、それでも、《責任意識を持った統治者》に関し、その類比が必然的に悪しき行為の言い訳にならざるを得ないというのとは、遙かに隔たっていた。フォークトが、自身この点を理解したり、或いは予期していたのかどうか、或いは彼は、殆んど確かに見境なく無邪気に、彼の説明を、より大きな責任あるものに対する訴えとして理解していたのかどうかは、留保されよう。恐らく、彼は、単純に時代の流れに急き立てられ、彼の概念システムを使って、あれこれ標を立て得ることを喜んでいたのだ。フォークトが、1940年12月4日、なおソヴィエトとの戦い以前、間接的に時代的状況に意見を述べた時に、このような印象に打たれるのである。

ローマ帝国は、諸民族の共同体でも国家連合でも、決してなかった。そこに実際存在した領域は、今日新たな秩序を打ち立てるべく立ち向かっている領域と、恐らく等しいものである。地中海全域、中央ヨーロッパ、北方地域、さらにスコットランドから紅海に至る諸地域、ジブラルタルからカラバチアに至る諸地域が、それである。しかし、今日形成されつつあるこの大広域の秩序は、諸国民の固有の生活規範に適った基盤のうえに生まれるに違いない。指導的諸国家の中から、その領域内では異質な諸権力が遠ざけられる帝国が誕生する。要するに、その領域に組み入れられる諸国家は、その従属関係の中で自らに固有なものと、自由の保障を保持していくのである。⁷⁶

フォークトは、彼の地理的—領域概念体系を、もちろん時流に乗って、この時代に初めて説明

し始めたわけではなく、既にもっと前からであった。1929年、彼は研究成果『Orbis Romanus』⁷⁷を公にし、1932年、実際的議論についての彼の知識を、その文献報告が示している「地理的領域」という章から『ローマ史』⁷⁸を始めた。古代史家として、彼は、独りだけでは全くなかった。彼より前に、例えば、オイゲン・トイブラーが、フリードリッヒ・ラツツェルの仕事を、はっきりと挙げていたのである。⁷⁹

次いで、フォークトは、1941年、『ローマの政治における領域理解と領域秩序』に更に深く取り組んだ。⁸⁰ この中で、彼は、<フリードリッヒ・ラツツェルの政治地理学と、たとえ彼ら一派が、その点について知らないにせよ、大変恩義を負っているカール・ハウスホーファーの geopolitische 理想世界>(36)と言っている。そこでは、彼は徹底的に折衷的であった。例えば、彼は、カエサルが、その向きを変えさせたゲルマニアやブリタニアの土地や住民の<異質性 Wesenfremdheit>という概念をハウスホーファーに負っていた(63,67)。ところが、その傍らで、彼は、<東方政策における暴虐的行為の根本的理由>であったかも知れない<東方におけるローマの地域的異質性 Raumfremdheit>という全く異なった概念を、実際的同義語にしていた(57)。今や<パルティア人の国家の異質な領域>が始まるユーフラテスに至るまで、ポンペイウスは、東方の領域を、たいそう適切に秩序化することを心得ていたと、確かに示している(61)。結局<世界征服の目的>は、<世界の支配者、カエサルの領域感覚>の所為にされた(65)。<これららの征服によって、地上世界 (orbis terrarum) の統一性が完成され、地上におけるローマの権力の無制約性が実現される>(64)。一方、フォークトは、アウグストゥスに対しては、帝国に堅固な国境を画し(66f.)、次いで再び帝国を完結するための、彼の様ざまな決断に対する適しい理由を色々記していた。<・・・ローマ人の国境観念のうちに、枯渇してしまった生命力の徵として普通認めねばならない硬直さが始まっていた>(68)。

この講演の個々の部分は、一ローマの契約政策(44ff.)とか、道路工事(48ff.)とかに関する、一全く、一般的関心事に関するものである。彼は、<自然な>国境の線引きと領域の確定の恣意性を、あたかもパロディーのように、一緒にして行っている。⁸¹ 故意ではないが—フォークトは、明らかに、破壊的であることを意識していなかった。

当時、Imperium Romanumについて全く講演などしなかったが、しかし、そのライフワークは、このことの理解を比較不可能な深さで努めていたアルフレッド・ホイスは、後に、彼の同僚たちの行為の特徴を上手く描いていた。⁸²⁸³

遺憾なのは・・・学問の自律性の放棄にあった、というのは、決して全部ではないが、法哲

学に至るまで、かなりの数の古代学の学者たちが、自分たちは、仲間であることを何とか學問的に合図するのを見せずにおれなかったことが問題なのであった。それまでは、決して口にその言葉を乗せたことのなかった人々によって一度、古代に人種が発見され、そして、地位ある指導者たちも、その言い方を思い上がってなしたが、十年後には、社会全体にとっても、彼ら自身にとっても、そのことは、たいてい大変に遺憾なことであった。・・・国民社会主義のために、ドイツの歴史のいわゆる輝かしい行為に対するコスチュームを仕立てたジャーナリストや文学者の世界に、学識あるものたちが陥ることは、必要ないことだった。そして、1945年以後、彼らは、その当時の彼らの愚かな行為を、彼らの子供たちの前から隠す必要はなかったであろう。⁸¹

恐らく、この偉大なアウトサイダーは、その際、他の多くの者たちが、その時代精神の虜になつたその広がりを過小評価している。彼の警告は、それ故、學問的責任に対してより緊要であるに過ぎない。何故ならば、時代精神は、大きく移り変わり、常に変わっていくが、その場合、そうした変化に遅れを取ってしまうことを恥じて、きっちりと時代精神に合わせていく者に対する危険を、常に繰り返し語っているのである。

註

1 K. Schwabe, Wissenschaft und Kriegsmoral. Die deutschen Hochschullehrer und die politischen Grundfragen des Ersten Weltkriegs, Göttingen 1969; M. Jeismann, Das Vaterland der Feinde. Studien zum nationalen Feindbegriff und Selbstverständnis in Deutschland und Frankreich 1792-1918, Stuttgart 1992; H. Fries, Die grosse Katharsis. Der Erste Weltkrieg in der Sicht deutscher Dichter und Gelehrter, 2Bde., Konstanz. 1994-95; St. Meinecke, Friedrich Meinecke. Persönlichkeit und politisches Denken bis zum Ende des Ersten Weltkrieges, Berlin u. New York 1995; W.J.Mommsen(Hrsg.), Kultur und Krieg: Die Rolle der Intellektuellen, Künstler und Schriftsteller im Ersten Weltkrieg, München 1996.

2 S. P. Lundgreen(Hrsg.), Wissenschaft im Dritten Reich, Frankfurt a.M. 1985; M. Broszat/ K. Schwabe(Hrsg.), Die deutschen Eliten und der Weg in den zweiten Weltkrieg. München 1989; H. E. Volkmdnn (Hrsg.), Ende des Dritten Reiches – Ende

- des Zweiten Weltkriegs, Eine perspektivische Rückshau, München 1995. (当然参照、C.J. Classen, Rhetorische Bemerkungen zu einem historiographischen Text, in; *HZ* 266[1998] 419-435); U. Wolf, Litteris et patriae. Das Janusgesicht der Historie, *Frankfurter Historische Abhandlungen* 37, Stuttgart 1996; P. Schöttler(Hrsg.), Geschichtsschreibung als Legitimationswissenschaft 1918-1945, Frankfurt a.M. 1997.
- ヴォルフの書のモットー《Litteris et patriae》は、補足すれば、シュトラスブルク・ドイツ帝国、フランス共和国大学の中央正面の上部に掲げられていた (Jena-Michel Davidの指摘)。1941年、シュトラスブルク帝国大学学長は、明らかにそのことを何も知ろうとしなかった。彼は、《Für Volk und Reich》というスローガンに賛同していた (Wolf. 472, 註41による)。
- 3 J. u. W. v. Ungern-Sternberg, Der Aufruf «An die Kulturwelt!» Das Manifest der 93 und die Anfänge der Kriegspropaganda im Ersten Weltkrieg. Stuttgart 1996.
- 4 興味深いもの : F. Stern, Die Historiker und der Erste Weltkrieg. Privates Erleben und öffentliche Erklärung, in: *Transit H.8* (1994) 124f.; 参照、B. Schröder-Gudehus, Deutsche Wissenschaft und Internationale Zusammenarbeit 1914-1928, Thèse Genf 1966; K.D. Erdmann, Die Ökumene der Historiker, Geschichte der Internationalen Historikerkongresse und das Comité International des Sciences Historiques, *Abh. Akad. D. Wiss. Göttingen, Phil.-Hist.Kll.*, 3.F., 158, 1987.
- 5 J. v. Ungern-Sternberg, Wie gibt man dem Sinnlosen einen Sinn? Zum Gebrauch der Begriffe «deutsche Kultur» und «Militarismus» im Herbst 1914, in: Mommsen (Hrsg.), 1996 (註1), 87ff.; St. Bruendel, Negativer Kulturtransfer. Die «Ideen von 1914» als Aufhebung der «Ideen von 1789», in; M. Schalenberg (Hrsg.), Kulturtransfer im 19. Jahrhundert, Berlin 1998, 153ff.
- 6 フランスでも支配的であった-30年代の絶頂期とは全く対照的に-沈黙が。J.-F. Sirinelli, *Intellectuels et passions françaises. Manifestes et pétitions au XX^e siècle*, Paris 1900, 133ff.
- 7 イギリスに関する最良の研究 : M. L. Sanders/Ph. M. Taylor, *Britische Propaganda im Ersten Weltkrieg 1914-1918*, Edinburg 1988. ドイツに関しては、差し当たり、v. Ungern-Sternberg 1996(註3), 17ff. 112ff.(文献あり)
- 8 Schönwalder 1992による指摘、140ff.; St. Meinekeによるその批評は、*Comparativ* 5 (1995) 140-147に。

- 9 F. Heus (Hrsg.), Deutschland und Korridor, Berlin 1939.
- 10 Schönwalder 1992, 210; 目下基本的なものは、F.-R. Hausmann, 『Deutsche Geisteswissenschaft』 im Zweiten Weltkrieg. Die 『Aktion Ritterbusch』 (1940-1945), Dresden, München 1998. (177ffに歴史家に関して)。「加わったゲルマン学者たちの一人は、『ドイツ精神科学の盛んな戦時動員』を称えていたが、第一次世界大戦では、ただ『純粹に私的な自発性』が存在したに過ぎなかつた。」引用は、W. Dahle, Der Einsatz einer Wissenschaft. Eine sprachinhaltliche Analyse militärischer Terminologie in der Germanistik 1933-1945, Bonn 1969, 68, 註21 1.
- 11 Das Reich und Europa, Leipzig 1941.
- 12 Das Reich (註11), IX.
- 13 Das Reich (註11), XII.
- 14 Das Reich (註 11), XIII.
- 15 H. Zeiß, Die Ausbreitung der Germanen in Mitteleuropa, in; Das Reich (註11), 1-21.
- 16 F. Rörig, Mittelalterliches Kaisertum und die Wende der europäischen Ordnung (1197), in; Das Reich (註11), 22-50.
- 17 V. Losemann, Nationalsozialismus und Antike. Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945, Historische Perspektiven 7, Hamburg 1977. 108ff. K. Christ, Römische Geschichte und deutsche Geschichtswissenschaften, München 1982, 206ff.; D. Königs, Joseph Vogt: Ein Althistoriker in der Weimarer Republik um im Dritten Reich, Baseler Beiträge zur Geschichtswissenschaft 168, Basel u. Frankfurt a.M. 1995, 38ff; Hausmann 1998 (註10), 125ff.
- 18 H. Berve, 同. (Hrsg.), Das Neue Bild der Antike, 2 Bde., Leipzig 1942, の前文、5.
- 19 Berve 1942 (註18), 10.
- 20 Berve 1942 (註18), 11. 参照、8f.<・・我われの勝利の日、その時、ヨーロッパは、新たな秩序の徴の内に内的統一と有機的な形態を得、さらに古典古代学のヨーロッパ的特性が、明らかに、より大きな意義を得るのに備える。しかし、それと共に、何びともその称賛を否定することの出来ない成果によって、我が民族と国家が、将来、世界において占めるべく招かれていくその地位に相応しい然るべき場所に置かれる責務を、ドイツの学問研究は負わされている。
- ＞ゲルマン学も、類似した問題の前に立っていた；『戦時動員』のその成果は；G. Fricke/ K. Lugowski (Hrg.), Von deutscher Art und Dichtung, 5 Bde., Stuttgart, Berlin 1941;

そのことは、Dahle 1069 (註10), 66ff.; W. Herden, Zwischen «Gleichschaltung» und Kriegseinsatz. Positionen der Germanistik in der Zeit des Faschismus, in: Weimarer Beiträge 33 (1987) 1865ff. 特に1878f参照。; Hausmann 1998 (註10), 169ff. ゲルマニステンの作品と並んで、その他の、略あらゆる古代学が、確かに純粹に言葉の上で全く正しく行動している。

- 21 我われの問題提起、in J. Vogt (Hrsg.), Rom und Karthago, Leipzig 1943, 5-8.
- 22 J. Vogt, Raumauflassung und Raumordnung in der römischen Politik, in: Das Neue Bild der Antike, Bd. 2, Rom, 100-132; U. Knoche, Die geistige Vorbereitung der augusteischen Epoche durch Cicero, ebda, 200-218; 更に必要ならば参照、F. Miltner, Die Antike als Einheit in der Geschichte, ebd, 433-453; A. Heuß, Die Gestaltung des römischen und des karthagischen Staates bis zum Pyrrhos-Krieg, in: Vogt (Hrsg.) 1943 (註21), 83-138.
- 23 若干の例 : E. Burck, Altrom im Kriege, in: *Die Antike* 16 (1940) 206-226 (ここには、また若干、国家形成についても); W. Marg, Kampf und Tod in der Ilias, in: *Die Antike* 18(1942) 267-279; H. G. Gundel, Der Keil in der germanischen Feldschlacht, in: *Das Gymnasium* 50 (1939) 154-165; R. Herzog, Kriegswunder in alter und neuer Zeit, in: *Das Gymnasium* 51 (1940) 1-15; F. J. Brecht, Wehrgeistig Erziehung durch den griechischen Unterricht, ebd, 32-42; J. Vogt, Caesar und seine Soldaten, in: *Neue Jahrbücher* 3 (1940) 120-135; M. Pohlenz, Das Erlebnis des Krieges in der Antike, in: *Neue Jahrbücher* 4 (1941) 49-61; とも角、ここにもまた : A.A.M. Esser, Invaliden-und Hinterbliebenenfürsorge in der Antike, in: *Das Gymnasium* 52 (1941) 25-29.
- 24 F. Miltner, Um germanische Einheit, in: *Die Antike* 18 (1942) 57-70; R. Herzog, Weltreichdammerung, in: *Das Gymnasium* 51 (1940) 101-106; O. Kluge, Der Romgedanke von der Antike bis zur Renaissance, in: *Das Gymnasium* 52 (1941) 38-70; M. Gelzer, Römische Führungsordnung, in: *Neue Jahrbücher* 5 (1942) 217-238 ; は期待されたものを示さない ; J. Wiesner, Die Bedeutung des Ostraumes für die Antike, ebd, 257-269.
- 25 F. Taeger, Das Römische und das Britische Weltreich, Marburger Universitätsreden Nr. 2, Marburg a. d. L. 1940 (フィリップス大学の教職員、学生たちの前で1939年、11月30日、12月1日になされた); E. Kornemann, Das Imperium Romanum. Sein Aufstieg und Niedergang, Vorträge der Friedrichs-Wilhelms-Universität zu Breslau im Kriegswinter

- 1940/41, Breslau 1941 (1940年10月24日開催された) ; J. Vogt, Der Reichsgedanke der römischen Kaiserzeit (1942年4月18日フライブルク大学ナチス大学教員同盟の研修会でなされた講演)、in; ders., Vom Reichsgedanken der Römer, Leipzig 1942, 5-34; M. Gelzer, Römische Führungsordnung (1942年5月8日ライプツィヒ大学文化史－大学史研究所でなされた講演)、in; *Neue Jahrbücher für Antike und deutsch Bildung* 5 (1942), 217-238; H. Berve, Imperium Romanum (1942年10月29日ライプツィヒ、ドイツ=イタリア協会の設立記念会でなされた講演)、Leipzig 1943.
- 26 K. Christ, Reichsgedanke und Imperium Romanum in der nationalsozialistischen Arä (1991) を参照のこと。in; ders., Von Caesar zu Konstantin. Beiträge zur römischen Geschichte und ihrer Rezeption, München 1996, 225-274 (しかし、ゲルツナーの講演は考慮されていないし、註1でテューラーの講演の日時を誤って引用している。) ; Königs (註17) 1995, 267ff.; Schönwalder 1992, 230f.
- 27 Th. Mayer, Deutschland und Europa, Marburger Universitätsreden Nr. 3, Marburg a.d.L. 1940, 3. 『戦時動員』の指導的代表者としてのマイヤーについては、Hausmann 1998 (註10), の各所参照。
- 28 Schönwalder 1992, 158ff.; Christ (註17) 1982, 230f. テューラー全般については、K. Christ, Fritz Taeger (1894-1960) を参照。in; Römische Geschichte und Wissenschaftsgeschichte 3, Darmstadt 1983, 128ff.; Wolf 1996 (註2), 204ff.
- 29 以下のような言い回しが、マイヤー風のスタイルを示している。<それら全ての者たちには、絶対に必要であるが、彼らの願望も夢も、過酷な現実よりもはるかに信じ易かった。>(1); <最も冷静な観察者によれば>(6)<国家が、より強く、より大きくなれば、愈々情け容赦なくなる事柄自体の論理>(6); 又、ローマとイギリスの類比；<ギリシアの自由の擁護者そして弱者の保護者として、強国に敵対している個々のすべての軍勢に呼びかけ、敵対するものを孤立させ、その諸国が内部から解体するべく、見事なあらゆる技巧を用いて偽りの宣伝に全力を尽くし、彼らを燃え上がる真っ赤な炎にまで焚きつける。>(7)は、全くマイヤー的センスである。; 更に、以下参照、J.v. Ungern-Sternberg, Politik und Geschichte. Der Althistoriker Eduard Meyer im Ersten Weltkrieg, in; W. M. Calder III/ A. Demandt (Hrsg.), Eduard Meyer. Leben und Leistung eines Universalhistorikers, Leiden 1990, 484ff.; <最も冷静な観察者>については、v. Ungern-Sternberg 1996 (註3), 61.参照。
- 30 H. Lea, The Day of the Saxon, London, New York 1012; Graf E. Reventlowによる

- ドイツ語訳は、Des Britischen Reiches Schicksalsstunde. Mahnwort eines Angelsachsen, Berlin 1913 (レヴェントロウによる前書きの付いた再版は、1917年、ベルリン)。
- 31 テエーガーが、1939年、たいそう近づいているLeaの悪夢とイギリスに敵対するこれら三ヵ国同盟を全く関連づけていないのは、注目に値する。
- 32 仰天するが、たとえば3ページには、<北欧の支配者>、<北欧の農民>に続いて、直ぐに以下のような確認がなされる。即ち<ローマは、ラテン人とサビニ一人の中の北欧系の血と、インド・ゲルマン以前の地中海的な血と、そして前アジア的な起源のはるかに虚弱な血が濃く混じり合わされたものと一つにされている彼の血液的構成に感謝した。> 参照、<スペイン人とガリア人、フェニキア人、シリア人それにアラブ人、トラキア人とイルリア人・・・たとえ、彼らの血管を異質な、あるいは同質の血が巡っていたにせよ、アウグストゥスの相続人として全く同じものを感じていたセプティミウス・セヴェルス自身、アフリカ人で、ハンニバルの墓を元のように直した。>(13). しかし、直ぐ続いて；<ローマ帝国は、内陸的－北欧的なものに基があるにせよ、決定的構成要素は、イギリス的なゲルマン的なものである。>
- 33 マイヤーと同様に、テエーガーにとっても、イギリスとローマの比較と、それにイギリスとカルタゴとの比較は互換可能である。(7. 17).
- 34 註32に引用されているものを、見よ。
- 35 Gelzer 1942 (註25), 232. ゲルツァーは、取り分け、H. Triepel, Die Hegemonie. Ein buch von fuhrenden Staaten, Stuttgart 1938 (2版、1943) を念頭においていたようだ (D. Timpeの指摘)。時代に対して全く示唆することなく、ゲルツァーは、やっていた。Die Anfänge der römischen Weltreichs, in : H. Dannenbauer/F. Ernst (Hrsg.), Das Reich. Idee und Gestalt. Festschrift Johannes Haller, Stuttgart 1940, 1-20. ゲルツァーに関しては、以下参照。J. Bleiken/Chr. Meier/H. Strasburger, Matthias Gelzer und die römischen Geschichte, Kallmünz 1977. K. Christ, Caesar. Annäherungen an einen Diktator, München 1994, 166ff.
- 36 Gelzer 1942 (註25), 232f.
- 37 Gelzer 1942 (註25), 238.
- 38 Sall. Cat. 2, 4.と6.
- 39 参照、<西方の死刑執行人>(15)としての若いスキビオ。
- 40 それとは矛盾して、コルネマンは、著書『Gestalten und Reiche』、Leipzig 1943. の中の論稿 Römische Geschichteで、歴史の教訓的役割を繰り返し強調している。<現代の歴史で

は、ただイギリスの世界帝国形成のうちに、対応するものを持っているそうした支配民族、世界的民族の歴史を、その生誕から死まで・・我われは、追跡することが可能であるという事実だけが、確かに、この歴史に、後のあらゆる諸民族に対するたいそう広範囲な模範的な教訓的性格を与えている。>(135). その他134,156,168も参照。専門的に、この論考は、多くの細かいことを示している。彼は、取り分け、アウグストゥスを強調している。<このプリンキパートゥス、或いは元首制・・は、全ローマ史の最も重要な結果であり、正に今日、ローマ史を意義深い教科書たらしめているのである。この体制が、専制的な権力の必要性と、市民たちの自己決定の自由を一致させることを、このヨーロッパの地で初めて求めたのであった。>(152). コルネマンのアウグストゥス像については、I. Stahlmann, *Imperator Caesar Augustus. Studien zur Geschichte des Principatsverständnisses in der deutschen Altertumswissenschaft bis 1945*, Darmstadt 1988, 130ff参照。しかし、ローマの発展の描写と、又結論も本質的に変わらなかった。<完全に民族を超えたものに成長したローマ帝国の使命は、果たされた。種族に関して言えば、ローマ (Romanentum) は、精神的であるが、反対に、負け知らずのゲルマン (Germanentum) が、西方におけるその継承者になった。>(167. Kornemann 1941 (註25), 26参照)

41 Berve 1942/43 (註25), 3. ベルヴェについては、K. Christ, *Neue Profile der Alten Geschichte*, Darmstadt 1990, 125-187参照。H. Berve, *Rom und das Mittelmeer*, in: E. Zechlin (Hrsg.), *Völker und Meere*, Leipzig 1944, 103-116は、ローマ人の海での活動の叙述に限定している。

42 Berve 1942/43 (註25), 6. 同, *Gestaltende Kräfte der Antike*, München (2版) 1966, 450f.

43 Berve 1942/43 (註25) 16. Berve 1966(註42), 460.

44 Berve 1942/43 (註25), 21. Berve 1966(註42), 465.

45 この点については、F. Graus, *Über die sogenannte germanische Treue*, in. *Historia* 1 (1957) 71-121. 同, *Herrschaft und Treue. Betrachtungen zur Lehre von der germanischen Kontinuität I*, in. *Historia* 12 (1966) 5-44を参照。更に、D. Timpe, *Zum politischen Charakter der Germanen in der Germania des Tacitus* (1988), in: ders., *Roman-Germanica. Gesammelte Studien zur Germania des Tacitus*, Stuttgart, Leipzig 1995, 154ff.を参照。(従士制度については、<ゲルマン的誠実>概念と全く関係のない興味深い制度)。

- 46 Berve 1942/43 (註25), 21. Berve 1966 (註42), 465は、合わせている。<力強いイタリアなるもの (Italikertum) の中心的な実質なしでは>－<儀礼上のウソ Etikettenschwindel>は、ここでは、殆んど避けられない。
- 47 <悲劇的>という概念で示されても、それは、歴史的説明では、しばしば、論理的に首尾一貫性がないことの結果である。
- 48 Berve 1996 (註42), 448.
- 49 基礎的なものは、P. Moraw/K. O. Frh. V. Aretin/N. Hammerstein/W. Conze/E. Fehrenbach, Reich, in : Geschichtliche Grundbegriffe 5 (1984), 423-508. 更に、Christ 1991/96 (註26), 256ff. Schönwalder 1992, 208ff. Wolf 1996 (註2), 265ff. 参照。
- 50 その点についての示唆は、M. Gelzer (註25), 232にだけ認められる。
- 51 Schönwalder 1992, 218. イタリア・ファシズムの別の横たわる諸問題に関しては、L. Polverini, L'impero romano—antico e modern. (本書. 145-161) を参照。
- 52 ベルヴェは、1942年3月 (Berve 1942/43, 註25, 参照)、<世界のかなりの地域の新たな秩序>とか、或いは<地中海領域の新たな秩序>と、終りでざっくばらんに<民族の領域Völkerraum>を語った際に(23)、－「Das Neue Bild der Antike」(註18)の彼の前文に反して— 明白にそれを避けている。コルネマンは、それを副題と結論部分だけに持つて来て、その導入を、かなり異様な地理学的ヨーロッパ案内に捧げているが、彼が詳論したことは、しかし効果なしのままである。ゲルツァーは、それには全く触れない。
- 53 本論、II 参照。
- 54 A. Mommigliano, Europa als politischer Begriff bei Isokrates und den Isokrateern (1933年! に初めイタリア語で)、in; F. Seck (Hrsg.), Isokrates, Darmstadt 1976, 128-138; 今日では、A. Demandt, Europa : Begriff und Gedanke in der Antike, in; P. Kneissl/V. Losemann (Hrsg.), Imperium Romanum. Studien zu Geschichte und Rezeption. Festschrift K. Christ zum 75. Geburstag, Stuttgart 1998, 137-157. (文献付き)、の概説 参照。
- 55 H. Gollwitzer, Europabild und Europagedanke. Beiträge zur deutschen Geistesgeschichte des 18. und 19. Jahrhunderts, München 1964; H. Hecker (Hrsg.), Europa—Begriff und Idee. Historische Streiflichter, Bonn 1991; M. Fuhrmann, Alexander von Roes: ein Wegbereiter des Europagedankens ?, SB Heidelberger Akad. D. Wiss., phil.-hist. Kl., 4, Jg. 1994, Heidelberg 1994.

- 56 P. Bernholz, *The International Game of Power*, Berlin, New York u. Amsterdam 1985; P. M. R. Stirk, *Europen Unity in Context. The Interwar Period*, London u. New York 1989; W. Loth, *Der Weg nach Europa. Geschichte der europäischen Integration 1939-1957*, Göttingen (2. Aufl.) 1991; D. Heater, *The Idea of Europen Unity*, Leicester u. London 1992; H. Müinkler, *Reich. Nation, Europa. Modelle politischer Ordnung*, Weinheim 1996; W. Schmale, *Das 17. Jahrhundert und die neuere europäische Geschichte*, in: *Historische Zeitschrift* 264 (1997) 587-611; P. Krüger, *Von der Schwierigkeit europäischen und transatlantischen Bewusstseins. Die Reichsregierung, Briands Europa-Vorstellung und die Rolle der USA 1929*, in: G. Müller (Hrsg.), *Deutschland und der Westen. Internationale Beziehungen im 20. Jahrhundert*. Festschrift K. Schwabe, Stuttgart 1998, 120-131; A. Fleury/L. Jilek (Hrsg.), *Der Briand-Plan eines europäischen Bundessystems*, Bern 1998.
- 57 H. W. Neulen, *Europa und das 3. Reich. Einigungsbestrebungen im deutschen Machtbereich 1939-1945*, München 1987, 21ff. 179ff. 1932年のローマでの会談については、A. Mattioli, *Zwischen Kulturkritik und Reichssehnsucht; Die Europa-Vision Gonzague de Reynolds (1932-35)*, in: *L'idee d'Europe dans la culture des pays de langue allemande du XIX^e au XX^e siècle. Actes du XXIII^e Congres de l'AGES Strausbourg, 4-6 mai 1990*, Strausbourg 1991, 22f. E. Demm, *Von der Weimarer Republik zur Bundesrepublik. Der politische Weg Alfred Webers 1920-1958*, Düsseldorf 1990, 187ff. カルコピーノの講演は、*Points de vue sur l'impérialisme romain*, Paris 1934, 259ff.; (A. Heuβ, *Gnomon* 15 (1939) 107 = Ges. Schr., Bd. 2, Stuttgart 1995, 1555は、それに対する批判)。
- 58 この機関誌の2ページは引用された綱領。グリムが、フランスの民族主義者Jacque Bainvilleの作品の、たいそう丁寧な前文をつけたドイツ語訳を直ぐに出版したのは、似た現象を示している。: *Histoire de deux peoples*, Paris 1915 (*Geschichte zweier Völker*, Hamburg 1939); und: *Les consequences politiques de la paix*, Paris 1929 (*Frankreichs Kriegsziel*, Hamburg 1939) ; 又、F. Taubert, *Friedrich Grimm – patriote allemand, européen convaincu*, in ; H. M. Bock 他 (Hrsg.), *Entre Locarno et Vichy. Les relations culturelles franco-allemandes dans les années 1930*, Paris 1993, 107–120を参照。更に、Z. Sternhell, *La troisième voie fasciste ou la recherché d'une culture*

politique alternative, in: G. Merlio (Hrsg.), *Ni gauche ni droite: Les chassés-croisés idéologiques des intellectuels français et allemands dans d'Entre-deux-guerre*, Talence 1995, 17–29.を参照。

- 59 W. Lipgens, *Documents on the History of European Integration*, 2 Bde., Berlin u. New York 1985/86; 註57も参照。ナチス体制の指導者たちの態度については、F. -L. Kroll, *Utopie als Ideologie. Geschichtsdenken und politisches Handeln im Dritten Reich*, Paderborn 1998 (索引、Europa参照); H. Arendt, *Elemente und Ursprünge totaler Herrschaft*, Frankfurt a. M. 1955, 650ff. は重要。
- 60 R. E. Herzstein, *When Nazi Dreams Come True. The Third Reich's Internal Struggle over the Future of Europe after a German Victory. A Look at the Nazi Mentality 1939–45*, London 1982, 2 f. 又、W. Loth, *Rettungsanker Europa ? Deutsche Europa-Konzeptionen vom Dritten Reich bis zur Bundesrepublik*, in: Volkmann (Hrsg.), 1995 (註2参照), 201–221.; A. Fleury/R. Frank (Hrsg.), *Le rôle des guerres dans la mémoire des Européens. Leur effet sur conscience d'être européen*, Bern 1997; T. Kirk, *The Nazi «New Order» and Fascist Europa*, London 2000.
- 61 H. Berve, *Der Europa-Begriff der Antike* (1949), in: Berve 1966 (註42), 467–484.
- 62 H. Gesche, *Rom – Weltoberer und Weltorganisator*, München 1981, 特に、262ff. (これについては、*Gnomon* 55 (1983) 466ff.); G. Dobesch, *Europa in der Reichskonzeption bei Caesar, Augustus und Tiberius*, in: *Acta Archaeologica Acad. Scient. Hungaricae* 41 (1989) 53–59; D. Kienast, *Auf dem Wege zu Europa. Die Bedeutung des römischen Imperialismus für die Entstehung Europas*, in: Hecker (Hrsg.), 1991 (註55), 15–31. G. Alföldy, *Das Imperium Romanum – ein Vorbild für das vereinte Europa ?*, Jacob Burckhardt-Gespräche auf Castelen 9, Basel 1999; 又、W. Dahlheim, *Ratlose Erben; Die Erinnerung an die Antike und die Zukunft Europas*, in: Festschrift K. Christ (註54) 105–122.は、より全般的。
- 63 初版は、1939年；4版、1941年。In: G. Maschke (Hrsg.), *Carl Schmitt, Staat, Grossraum, Nomos. Arbeiten aus den Jahren 1916–1969*, Berlin 1995, 269–320 (345ff., 358ff.は、実際の歴史に関する編集者の註解); [訳者註; 服部平治他訳、『ナチスとシュミット 三重国家と広域秩序』 1976 東京、に邦訳が含まれている。] 以下参照、L. Gruchmann, *Nationalsozialistische Grossraumordnung. Die Konstruktion einer «deutschen Monr*

- oe-Doktrin》, Stuttgart 1962. J. W. Bedersky, Carl Schmitt. Theorist for the Reich, Princeton 1983; K. Schwabe, Deutsch Hochschullehre und Hitlers Krieg (1936-1940), in: Broszat/Schwabe (Hrsg.), 1989 (註2), 313ff.; M. Schmoeckel, Die Grossraumtheorie: Ein Beitrag zur Geschichte der Völkerrechtswissenschaft im Dritten Reich, insbesondere der Kriegszeit, Berlin 1994; H. Hofmann, Legitimität gegen Legalität. Der Weg der politischen Philosophie Carl Schmitts, Berlin (3版) 1995, XXVII; 198ff.
- 64 Völkerrechtliche Grossraumordnung (註63), 283.
- 65 Ebd., 294f.
- 66 F. Naumann, Mitteleuropa, Berlin 1915; P. Stirk (Hrsg.), Mitteleuropa. History and Prospects, Edinburgh 1994. 参照。《中欧》と云う考えは、既に、C. Franz, Untersuchungen über das europäische Gleichgewicht, Berlin 1859. にある。それについては、H. Münkler 1996 (註56), 134ff.
- 67 Triepel 1938 (註35); (確かに、共和制期ではあるが、むろん、ローマに関する一章と共に)。
- 68 ヒトラー自身、1939年4月28日の国会演説で、これらの議論を利用していた。：Maschke (Hrsg.), 1995 (註63), 347f.
- 69 テヘラン (1934) からヤルタ (1945) に至るまでの連合国との会談を見れば、十分である。このことは、第二次世界大戦後の時代にも当然当てはまり、それについては、所謂ブレジネフ・ドクトリンも参照されよう。
- 70 W. A. Williams, Amerikas <idealistischer> Imperialismus 1900-1917 (1962), in: H.-U. Wehler (Hrsg.), Imperialismus, Köln (3版) 1976, 415-442.
- 71 ついでに言えば、シュミットが、一ちょうどその当時、不可欠の一帝国概念の紛糾を見落としてしまうことは決してあり得なかった。彼の論稿の第5節（《国際法における帝国概念》）と第6節（《帝国と領域》）を参照。
- 72 Vogt 1942a (註25). フォークトについては、Christ 1990 (註41), 63-124; Königs 1995 (註17); K. Christ, Zum 100. Geburstag von Joseph Vogt, in: *Historia* 44 (1995) 504-507. 参照。シュミットとフォークの間の関係を打ち出したのは、：R. Faber, Abendland. Ein <politischer Kampfbegriff>, Hildesheim 1979, 201ff.
- 73 Christ 1991/96 (註26), 265参照。<フォークトの《ライヒ》の理念的な理解に特徴的である定義の試み>
- 74 <大きな行為の画期的な意味についての知識は、当然、責任の重い訴訟を>、運命的に思い

出させても、フォークトは、《レーム事件》の際のヒトラーを、カティリナに敵対するキケロとは、認めなかった。：J. v. Ungern- Sternberg, Das Verfahren gegen die Catilinaire order: Der vermeidene Prozess, in: U. Manthe/J. v. Ungern-Sternberg (Hrsg.), Grosse Prozesse der römischen Antike, München 1997, 89ff.

75 もちろん、完全ではないが。：<人は・・ロムルスの子供たちは、今や世界の多くの血の流れの混じった混血であると、無視した>(28). しかし、カラカラ帝は、かつて一度も彼に相応しい形容辞を受けていない。(16).

76 . Vogt, Römische Glaube und römisches Weltreich, in: 同、1942b (註25), 118f. (テュービンゲン科学アカデミーにおけるナチス大学教員同盟の講演)

77 J. Vogt, Orbis Romanus. Ein Beitrag zum Sprachgebrauch und zur Vorstellungswelt des römischen Imperialismus, Tübingen 1929; 改訂されているのは、ders., 1942 (註25), 170-207.

78 J. Vogt, Römische Geschichte. Erste Hälfte. Die römische Republik, Freiburg i.Br. 1932, 1 - 9. 335; それについては、Königs 1995 (註17), 88ff.

79 Eugen Täubler, Grundfragen der römischen Verfassungsgeschichte (1926), in: ders., Der römische Staat, Stuttgart 1985, 127. 意図されているのは、F. Ratzel, Politische Geographie, München u. Berlin (3版) 1923.

80 最初に、Berve 1942 (註18); 次いで、Vogt 1942 (註25), 35-82. フォークトの説明に関しては、K. Brodersen, Terra Cognita. Studien zur römischen Raumerfassung, Hildesheim 1995.参照。

81 今日の議論については、M. Korinman, Quand L'allemande pensait le monde. Grandeur et décadence d'une géopolitique, Paris 1900; R. Sprengel, Kritik der Geopolitik. Ein deutscher Diskurs 1914-1944, Berlin 1996. を参照。

82 彼の一確実に関係せる一貢献は、Die Gestaltung des römischen und des karthagischen Staates bis zum Pyrrhos-Krieg, in: Vogt (Hrsg.), 1943 (註21), 83-138.であり、これは、全くあらゆるイデオロギー的迎合と関係なく、十数年間事実上標準的なものとされていた。今日では、むろん、W. Ameling, Das Problem des karthagischen Staats, in: *Historische Zeitschrift* 257 (1993) 109-131. (これの批判は、L. Loreto, *Quaderni di storia* 23, n. 45 (1997) 237-250.)

83 D. Timpe, Kaiserzeit und Weltgeschichte bei Alfred Heuß, in: H.-J. Gehrke (Hrsg.),

Alfred Heuß – Ansichten seines Lebenswerkes, Stuttgart 1998, 79-114. の印象的な評価を参照。

- 84 A. Heuß, Versagen und Verhängnis. Vom Ruin deutscher Geschichte und ihres Verständnisses, Berlin 1984, 106. 108. この書については、W. Schller, Alfred Heuß und die zeitgenössische Politik, in: Gehrke (Hrsg.), 1998 (註83), 153-162. 参照。今日、大いに顧慮すべきは、J. Bleiken, Gedanken zum Fach Alte Geschichte und ihren Vertretern, in: Gesammelte Schriften, Bd. 2, Stuttgart 1998, 1149-1162.